麻原彰晃の聖者誕生

チベット仏教の高僧が、インド・ヨーギが、
世界の聖者が絶賛した！





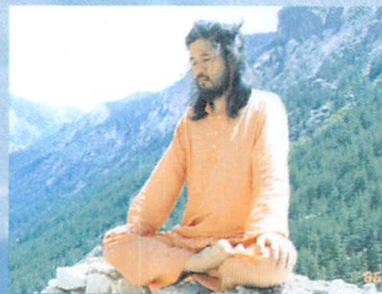
Complete Absolute Divine Wisdom

その日、天は歓喜し、地は震えた。

聖者誕生



大いなる覚醒

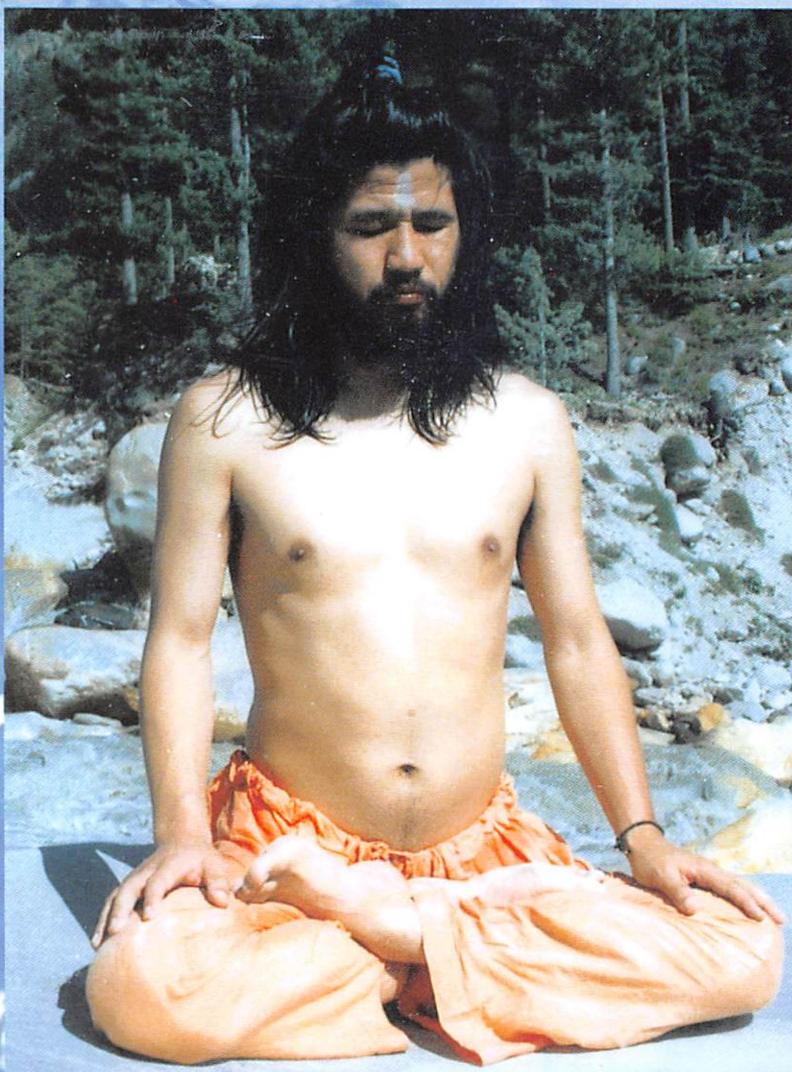


一九八六年夏、一つの魂のもとに光が降り立った。

崇高なる覚醒が生じたのである。

その瞬間、すべての苦悩は滅し、生と死の壁は破られ、

二度と壊れることのない至福の状態が訪れた。



最終解脱——、
〝最高の聖者〟はここに誕生した。

証明

神々の奇跡

生死を超越した瞬間、
聖者は〃真実〃を知った。





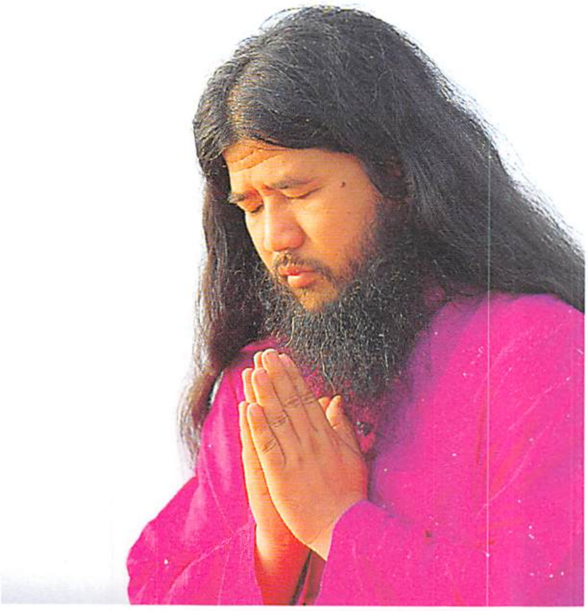
風(ルン)のステージに到達したとき、
聖者は重力を超えた。

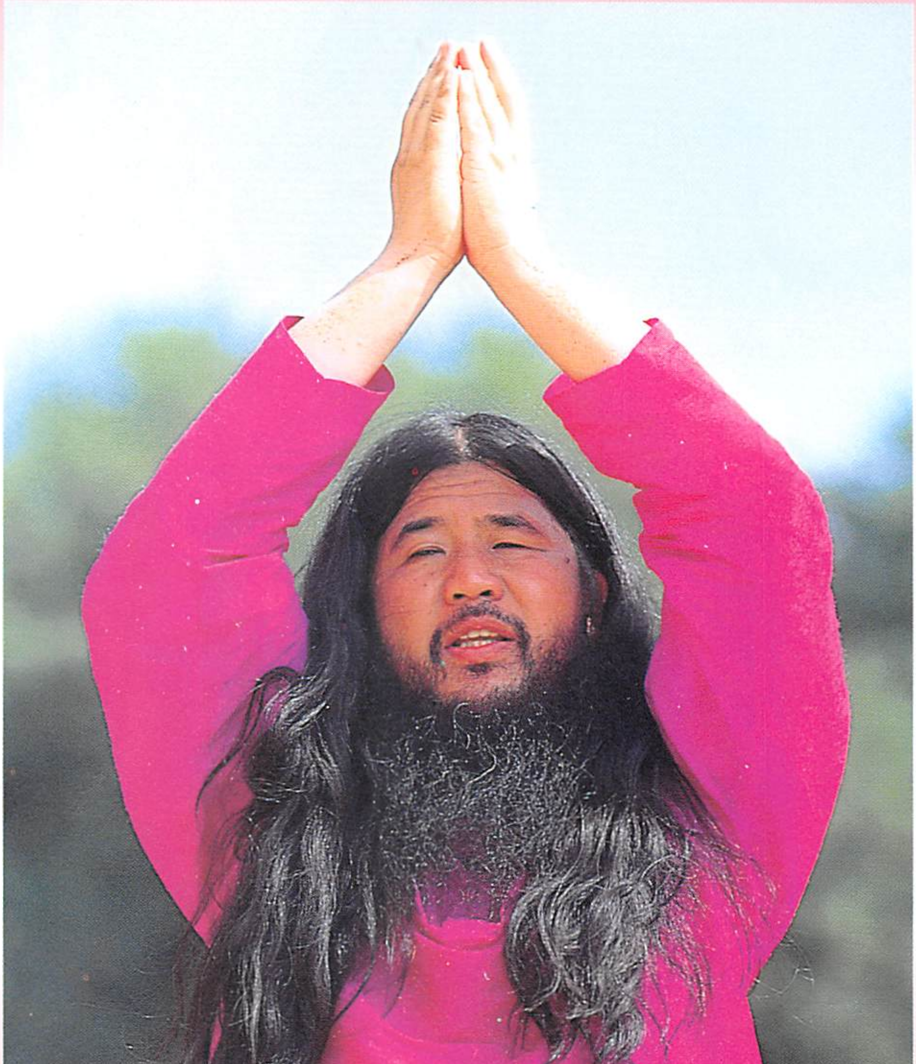
聖者が深い瞑想に入るとき、
呼吸は止まり、心臓さえも完全に停止してしまう。



誓言

願わくば、すべての魂がマハーヤーナに入るまで
シヴァ大神の僕として救済活動をし
マハーヤーナへ入る最後の魂とならんことを――







交流

最高の法を伝えるために

チベット仏教の政治・宗教の最高指導者、
ダライ・ラマ法王

チベット仏教ニンマ派の成就者、
カムトゥール・リンポチェ師





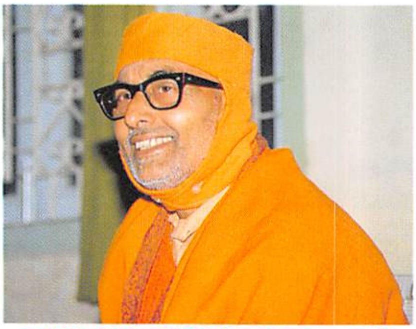
チベット仏教カギュ派の総帥、
故カール・リンポチェ師



チベットで仏教を守り続ける大昭寺の僧院長、
ロサン・プンソム師

交流

法輪は世界を巡る



19世紀の偉大なヨーギ、
ラーマ・クリシュナ・パラマハンサの孫弟子にあたる
スワミ・アカンダナンダ

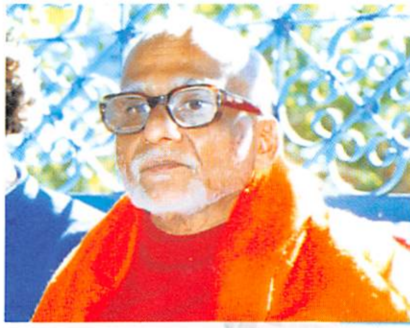


ラオス仏教連盟会長、
ビシェット・シンハラット大師

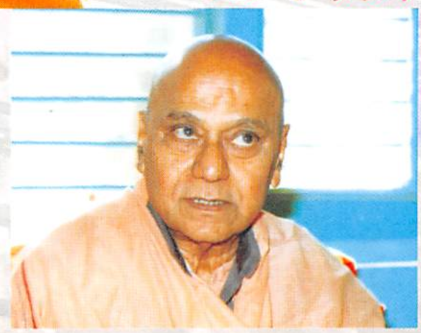
熱のヨーガの成就者、ロブサン・テンジン師



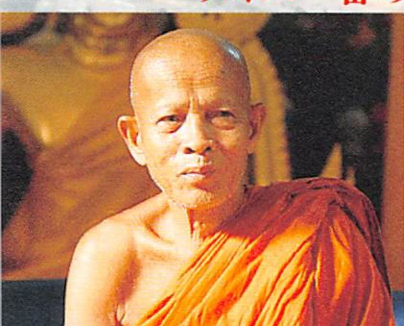
スワミ・クリシュナナンダ



スワミ・チタナンダ

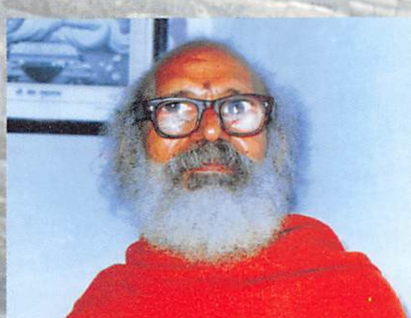


ラオス一番の瞑想家、サーリー師

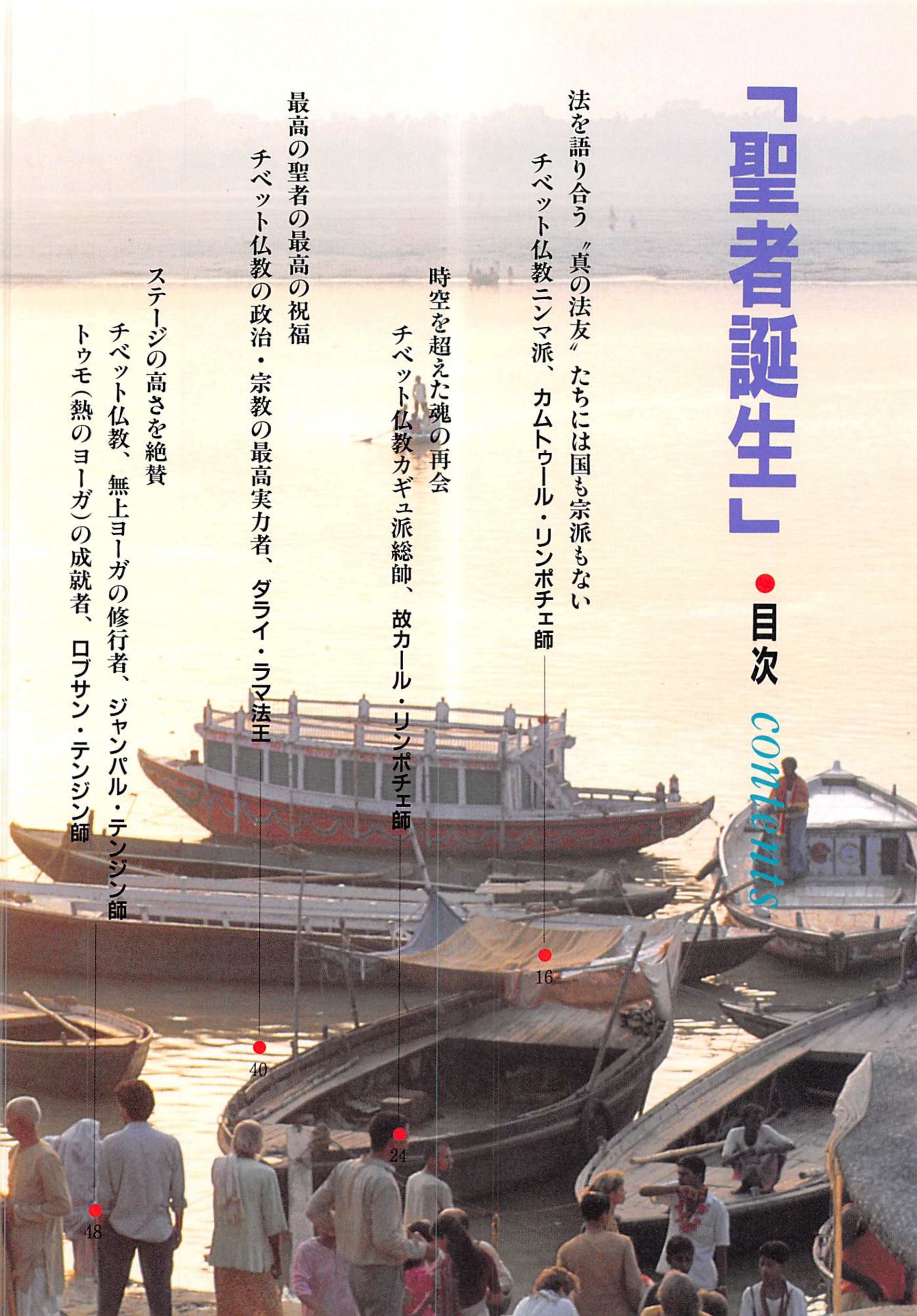




ジュニアーナ ヨーガの指導者、
スワミ・ダイヤナンダジ

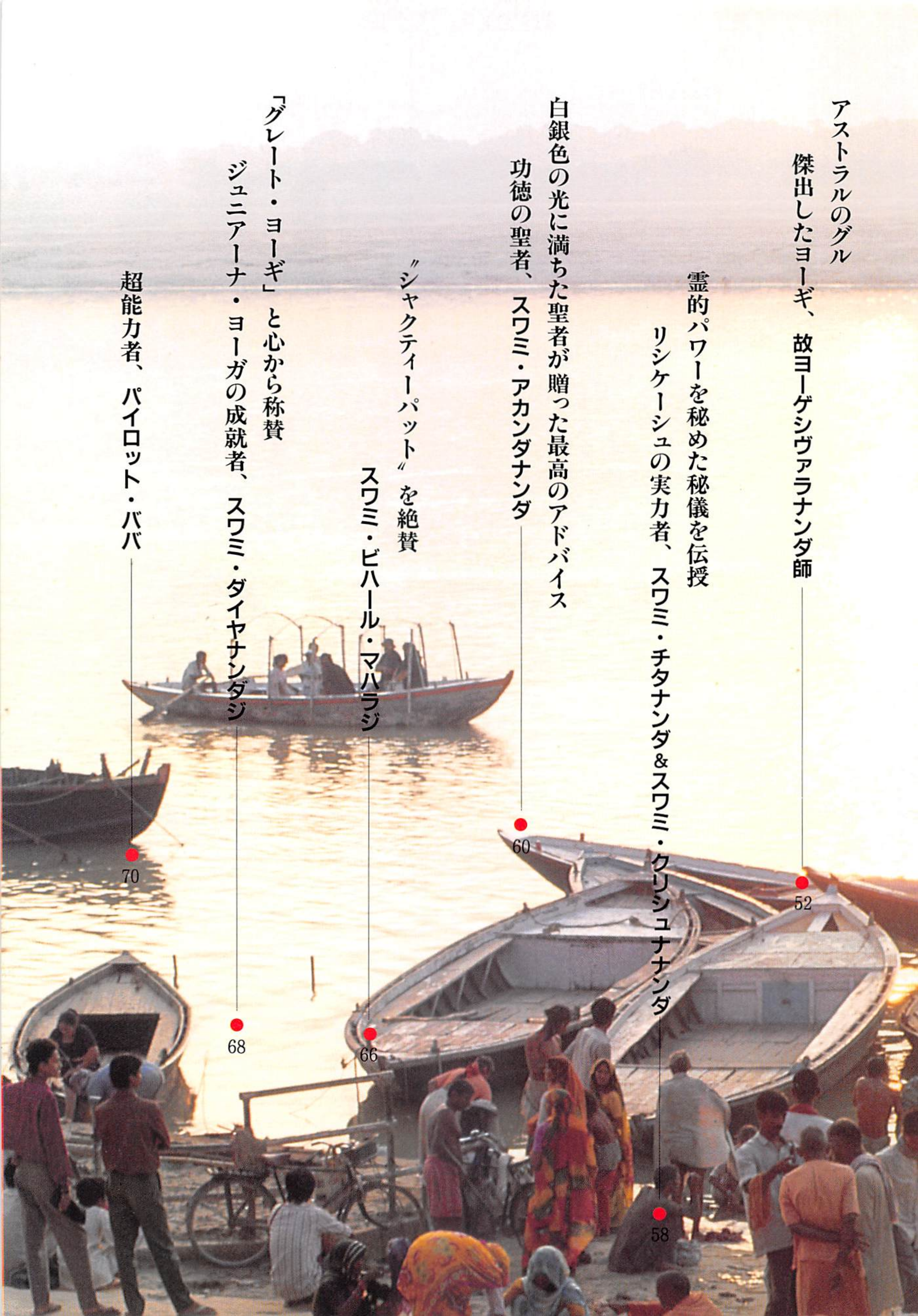


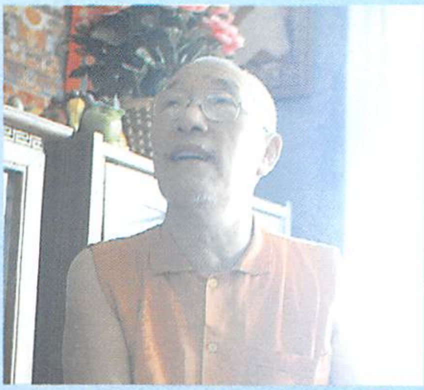
スワミ・ビハール・マハラジ



「聖者誕生」

●目次 *contents*



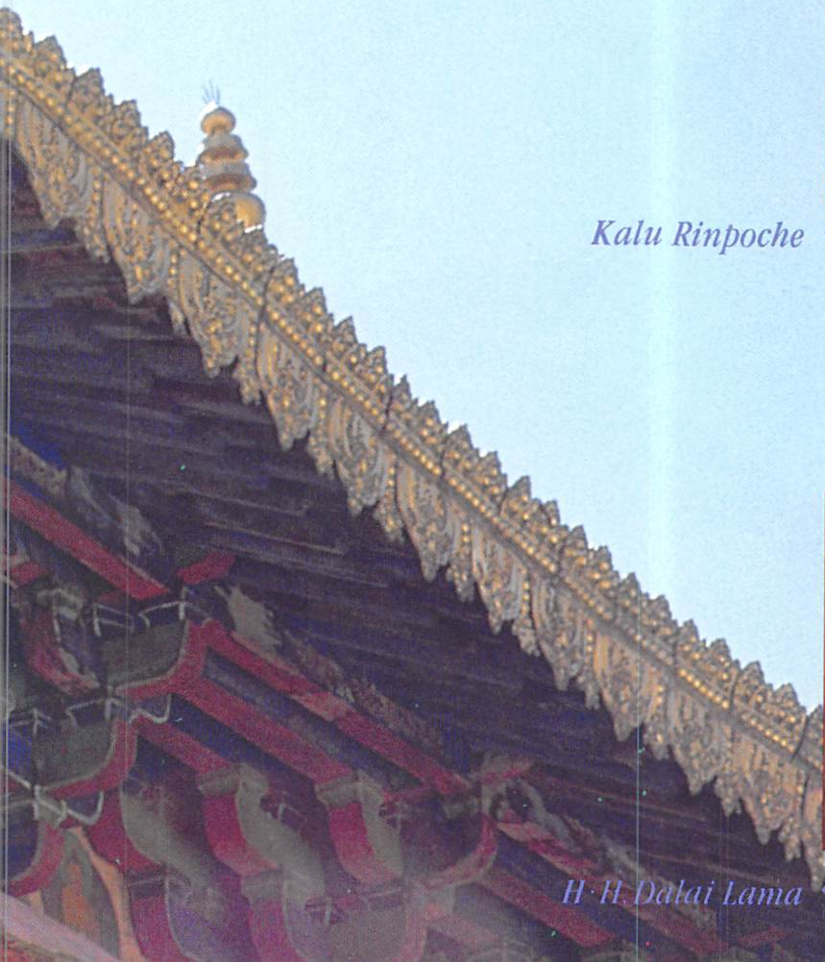


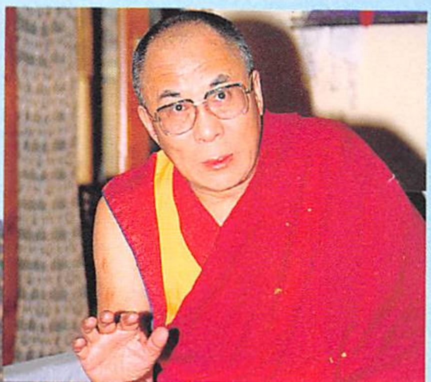
Khamtul Rinpoche ❖カムトゥール・リンポチェ師

らないものが



Kalu Rinpoche ❖故カール・リンポチェ師





H·H. Dalai Lama ❖ダライ・ラマ法王


絶対に守らなければな
ここにある
Here is something
that must be protected at any cost.

法を語り合う〝真の法友〟たちには
国も宗派もない





インド・ダラムサラにいらっしゃるチベット仏教ニンマ派の成就者、カムトゥール・リンポチェ師。師は麻原尊師のステージの高さを絶賛する聖者の一人である。

「わたしは尊師の献身的な心、親切心、寛大さ、無私無欲な心など、仏教を修める者としての将来の資質を深く称賛いたします」

チベット仏教ニンマ派、

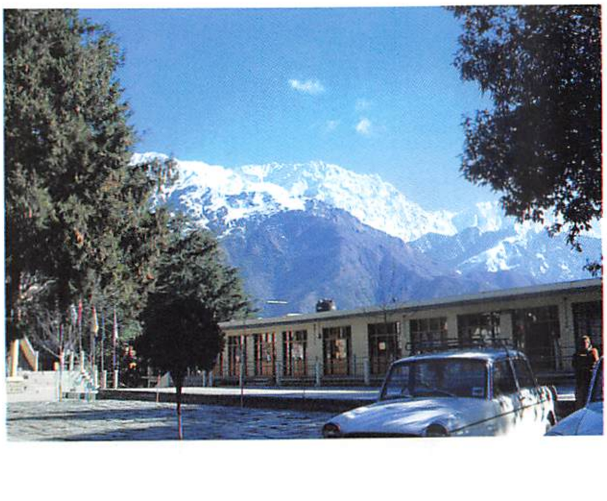
カムトゥール・リンポチェ師

Khamtul Rinpoche

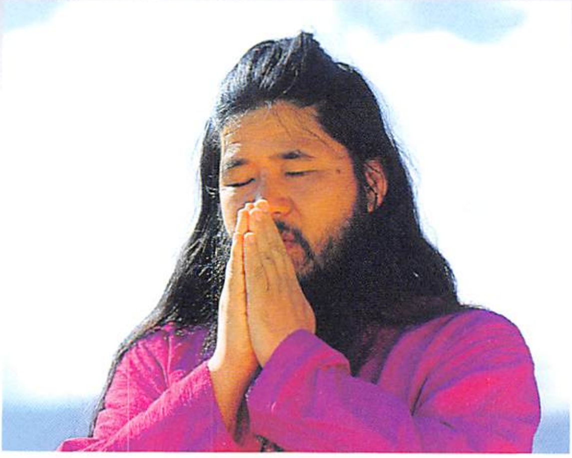
「完全なる絶対なる神の叡智を得られた素晴らしいステージです」

麻原尊師が訪れる度に目を細めながら手放しで賛辞を贈る。また、チベットの経典にも記されている最高の成就の状態どおりの尊師の修行体験を聞くのが大変楽しみである、とも語っていらっしゃった。

ここに紹介するのは一九九一年五月、麻原尊師がダラムサラを訪れて師と対談されたときの記録である。











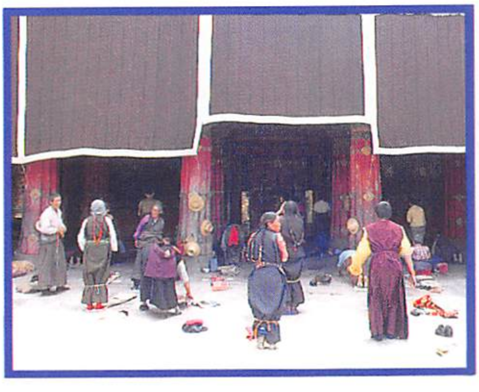
■「内側の光というのは外側の昼間の光よりもものすごく絶えず強い状態です」■

（麻原尊師）　近ごろのわたしの状態をご説明しますと、これは今回ダライ・ラマ法王にお会いしに行った理由でもありますけれども、ガンダルヴァとか、あるいはナーガとか、あるいはサントゥシタとか、あるいは夜摩、あるいはブラフマンとか、それらをよく霊視をするように



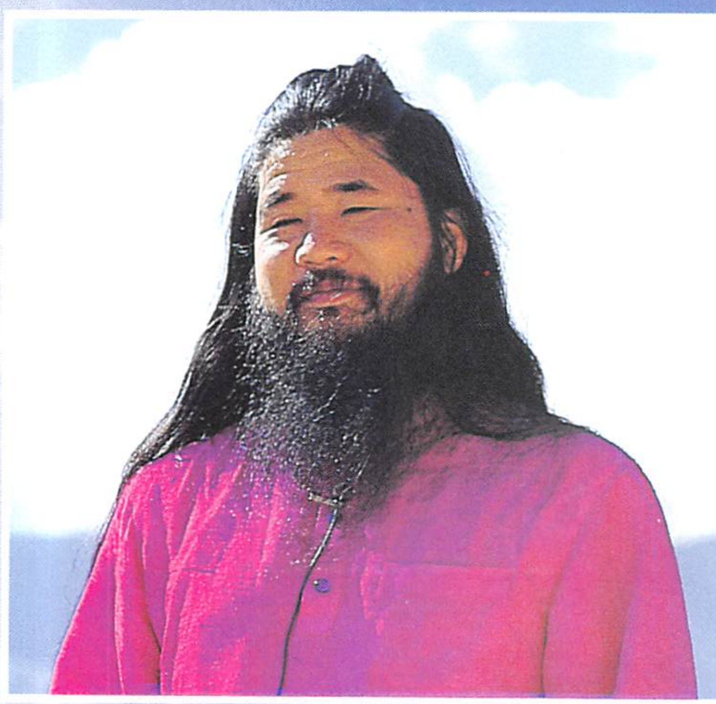


なってきています。あと、インドラ、光音天もですね。
（カムトゥール・リンポチェ師）　チベットとインドでは、同じように体はこの世界にいて、心がそういう世界に飛ぶということはよくあります。
（麻原尊師）　おそらくこれもブラフマンの世界だと思いますが、そこに修行の道場があって、そこで空中をグルが飛来していましてね、まあこれはわたしの未来生だと思うんですけれども、そのとき





のグルはわたしだったわけです。
そこのペットはね、虎でした。しかしその虎はあるときは人間のような形をとって、あるときは虎の形をしていました。そこで多くの者が修行をしていて……。
その世界もブラフマンの世界じゃないかと思うけれど、それはどうでしょうか。
（カムトゥール・リンポチェ師） ブラフマンの世界だと思います。その世界ではエネルギーとシステムを完全にコントロールできる人は動物とか人間とか、そういうふうに体、フォームを変えることができますから、そうだと思います。



（麻原尊師） まあ、自分自身の今の状態からいくとダルマカーヤ（無色界）からサンボカカーヤ（色界）、そして今ニルマナカーヤ（現象界）にゆっくりゆっくりと落ちていってるというか、経験がどんどん深まっていってるような気がします。
というのはどういうことかというと、まず、外側の世界は（視力を失っているので）完全に見えないわけだけど、内側の光というのは外側の昼間の光よりもものすごく絶えず強い状態です。安定しているし、相手の、例えばバルドー（発している光）も瞬時にわかるし、それから









ポア（自分や他の意識を高い世界へ引き上げること）したときに、その世界の光が降りてきて、その一粒一粒がね、その世界のヴィジョン化されていっています。

（カムトゥール・リンポチェ師） ニンマ派の伝統によりますと、トゥゲ、尊師がおっしゃる粒々、これをトゥゲといいますけど、非常に高い悟りを得た人は、そのビンドゥーが徐々に徐々に大きくなっていくのを見ることができます。これはわたくしの経験と非常に似ていると思います。

（麻原尊師） そうですか。

（カムトゥール・リンポチェ師） ダルマカーヤというのは他の生き物たちにとってはあまり利益がありません。サンボガカーヤとニルマナカーヤの方が高いステージで他の生き物に対して利益があります。

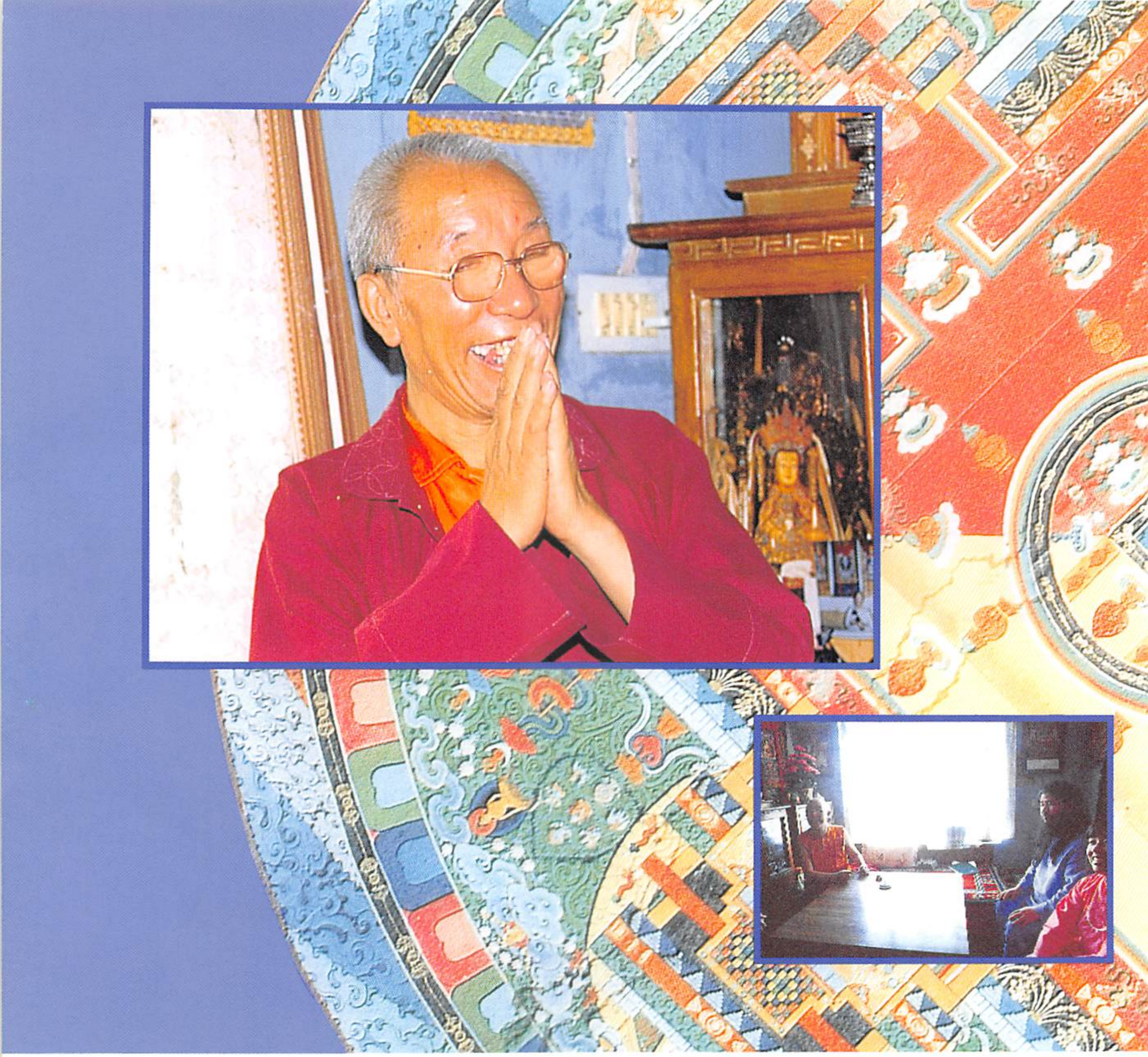
「尊師ご自身が他の生き物を助けるためにこの世に長くとどまる決心をなさらなければいけません」

（麻原尊師） ところで、あなたに教えていただいた、例えばツァンダリーのプラーナーヤーマにしろ、あるいは、いろいろなアドバイスにしろ、その貴重さを身に染みて感じております。



最後に一つ質問したいんですけれども、今わたしの状態というのは、意識ははっきりしていて経験が止滅しているという感じなんです。例えば何か食べますよね、あるいは、その味覚が思い出せないとか、あるいは、いろんなフィーリングが、例えば痛みがあるはずなのに痛みが全くないとか、あるいは苦しみがあるのに苦しみがないとか、わかるかな、要するに完全に経験が止滅している状態で、それでいて意識と光はどんどんどんどん強くなっている段階なんです。

（カムトゥール・リンポチェ師） それを聞いて大変うれしいと思います。非常にうれしいです。これはイエシエといわれている人が経験できる段階で、普通の人は経験できない段階です。それは非常に、最高の智慧を得た段階です。パーフェクト・アブソリュート・ディヴァイン・ウィズダム（完全なる絶対なる神の叡智）を得ることのでき



た素晴らしいステージです。

（麻原尊師） わかりました。ありがとうございます。

（カムトゥール・リンポチェ師） 尊師のご長命をお祈りいたします。尊師ご自身が他の生き物を助けるためにこの世に長くとどまる決心をなさらなければいけません。

（麻原尊師） トージェ・チェ（ありがとうございました）。

（カムトゥール・リンポチェ師） 今、お茶を用意しています。

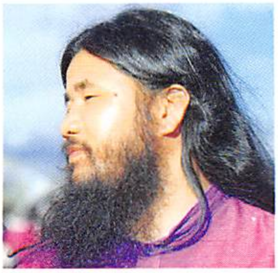
（麻原尊師） 最高の法というお茶をいただきました。

それから、あなたもすべての魂のためにできるだけ長くこの人間界におとどまりになってください。

（カムトゥール・リンポチェ師） トージェ・チェ。

時空を超えた魂の再会





無始の過去から数え切れないほどの転生を繰り返し、数え切れないほどの過去世を持つ我々の魂。未熟な魂は心のけがれゆえ前生の記憶を忘却の彼方に置き去りにされてしまうが、輪廻の輪を超え、生死を超越した聖者たちは、縁ある魂との出会いの瞬間とその意味を知る。それは我々未熟な魂の目にはときとしてドラマティックな印象を与える

チベット仏教カギュ派総帥、

故カール・リンポチェ師

Kalu Rinpoche

「皆さんは偉大な仏教の師に巡り合い、教えを受けています。それが皆さんのグル、麻原彰晃尊師です」

ものである。

チベット仏教カギュ派の総帥、カール・リンポチェ師と麻原尊師の出会いも、我々の目にはドラマティックなものに映るに違いない。一つの生で麻原尊師のグル（霊的指導者）であった故カール・リンポチェ師。チベット仏教カギュ派の総帥であられた師もまた、中国共産党によるチベット侵攻により故国を捨て異郷で仏教を守り続けたラマ（チベットの高僧）の一人であった。チベット仏教では珍しく派を超えた親交を持ち、晩年も老体を顧みずに台湾、香港などを訪れては積極的に真理の流布に励まれ、また、広く海外に真理の法則を伝播するために、弟子たちを集め、チベット語から英語、英語から他の国の言語へ、あるいは直接英語以外の言語へとチベット仏教の経典の翻訳作業も行なっていた。

これは二人の聖者の時空を超えた不思議な関係を綴った記録でもある。





一九八八年三月二日、ご自身の生誕日にも当たるこの日、麻原尊師は不思議なヴィジョンをご覧になったそうだ。あるチベットのラマが現われ、シャクティーパット（成就者が直接相手の身体に触れてエネルギー移入を行なうもので、イニシエーションの中でも最高の部類に入る）等の影響で弱りつつある目を治すイニシエーションを授けてくださったというのである。

そのラマは尊師に対してこう語った。

「わたしはカール・リンポチェというチベット仏教カギュ派のラマである。わたしはあなたの前生のグルでもある。」

カール・リンポチェ……、このとき麻原尊師は、数年前にこの名前を耳にしたことを程なくして思い出したそうだ。最終解脱を果たされる以前、自身を導いてくださるグルを探していたときのことである。ダライ・ラマ法王から高いステージにあると認められる三人のラマの名を教えいただいたのだが、そのうちの一人



がカール・リンポチェ師だったのである。

「しかし、ダライ・ラマ法王はゲールク派であるのであるから、法王が教えてくださったラマはすべてゲールク派に属しているのではなかっただろうか？　わたしはカール・リンポチェ師もゲールク派のラマであろうと信じ込んでしまっていたので、このとき自分が見たヴィジョンが真実のものであるとはとうてい信じられなかった。」

麻原尊師は当初こう語っていたそうだがその疑問はすぐに晴れた。書棚の中からカール・リンポチェ師が著した英語訳の本を一冊探し出して見てみると、師はヴィジョン通り、カギュ派のラマであったのである。さらに、本に載っている写真でヴィジョンそのままの師の姿を確認し、ヴィジョンの正しさを確信されたそうである。

約束された出会い

カルカッタから北へ五百五十五キロ。イギリス人によって避暑地として開発されたダージリンは、ヒマラヤの峰々がすぐそこに眺められる標高二千メートルの山上に位置している。バクドグラ空港から車でおよそ二時間余り、カール・リンポチェ師はこのダージリン地方のソナダというところにあるサムドラブ・ダルジェイ・チョリング・モナストリーというお寺にいらっしゃった。

しかし、麻原尊師が初めてこの地を訪れた八八年六月には、あいにく師は不在だった。運命の出会いはこの直後、香港で行われることになった。以下はそのときの記録である。

≪「いよいよカール・リンポチェに会える。あんなにも探し求めた前世のグルに、この香港で会えるんだ。」

わたしの心は本当に喜んでいた。タクシーに乗っている三十分の間、わたしは、「カール・リンポチェはわたしのことをわかってくれるだろうか。前世の弟子だと、一目でわかってくれるだろうか」と考えたり、「いや、彼ほどの人だ。言葉がなくてもわかってくれるはずだ」と思ってみたり。しかし、何よりも一番、「わたしは会わなければならない人に会いに行くんだ」という気持ちが強かったといえる。

香港島はビルがとても多いのであるが、カール・リンポチェはそれらのビル群の中の一室にいらっしゃった。わたしたちは、祭壇のある板張りの部屋を通り、一番奥にあるカール・リンポチェの部屋に通された。何人かのチベット人が、突然の見知らぬ訪問者であるはずのわたしたちを、何一つ質問することなく彼の部屋に案内してくれたのである。（この日、カール・リンポチェ師は周囲の者たちに





「今日わたしを訪ねてくる人がいたら、どんな人でもいいからこの部屋に通しなさい」と語っていたそうである）

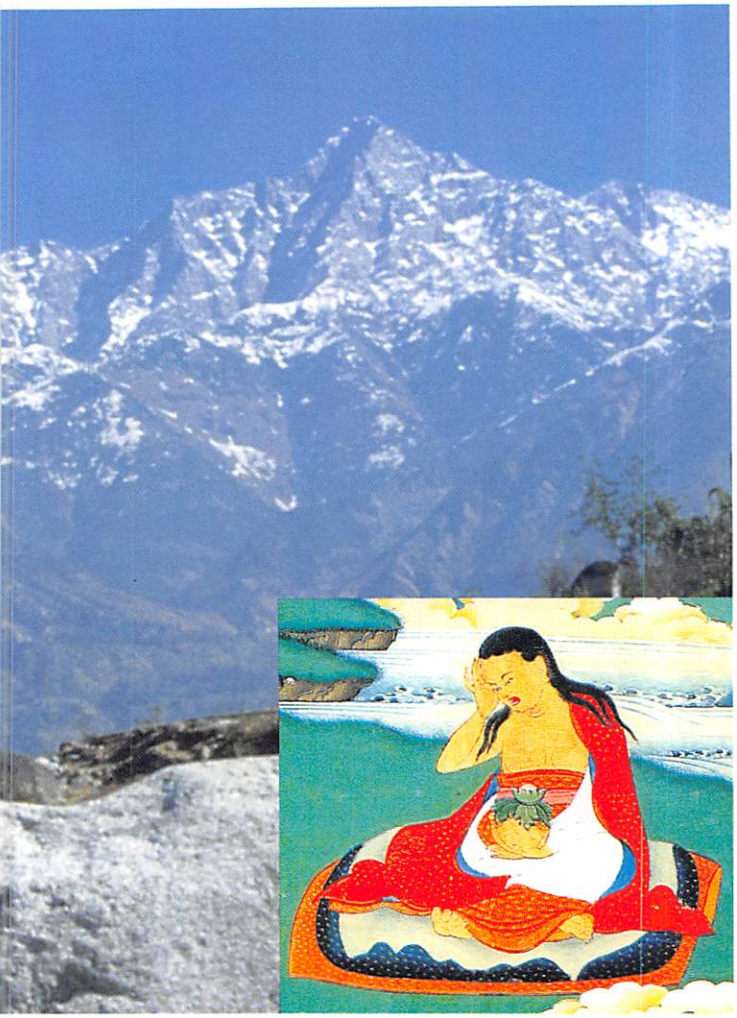
お会いした瞬間、わたしはやはり彼が前世のグルの一人であったと直感した。今までにもいろいろなラマに会ってきたが、完全に成就しているな、終わっているな――と感じたのは、この方が初めてであった。彼は、サットヴァの透明な光に照らされている。まさしく聖者であった。

わたしには彼の地エレメントと風エレメントがはっきりと霊視できた。地エレメントは強い意志と、そして風エレメントは生命エネルギーを表わしている。

カール・リンポチェの横に、チベット僧衣を着た若い白人の僧がいて、チベット語を知らないわたしたちのために英語で通訳してくれた。しかし、わたしにはカール・リンポチェとの間に言葉はいらないようにさえ思われた。

わたしが通訳の僧に、どのように手を尽くしてカール・リンポチェに会うために香港にまでやってきたかを話すと、彼は人なつっこい笑顔を見せて喜び、それをカール・リンポチェに伝えた。若者はグルのことを我が事のように喜んでいるのである。わたしは、「カギュ派はオウムと似ているところがあるんだな」と思った。オウムには、帰依してくれている弟子が数多くいる。そして、彼らもまた、わたしのことを我が事のように喜んでくれるのだ。

わたしは、「わたしはあなたの前世の弟子です」と自己紹介した。リンポチェも、「わたしとあなたの、この強い特別な関係は、会っただけですぐにわかりました」と応じてくださった。そして、「わたしはあなたにカギュ派のマハー・ムドラーを伝授いたしましょう。それから六ヨーガも伝授いたしましょう」と、すぐにわたしが教えを請いに来たことを



察したらしく、修行の話をし始めた。》

《リンポチェの秘書に帰り際、カール・リンポチェ師のイニシエーションには何日くらいかかるのか、と聞いいた。すると彼は、

「いや、今回のはイニシエーションではありません。あなたに〝教える〟といっておられるので、何日かかるかは見当がつきません。普通のイニシエーションだったら、二日とか三日とか日数が区切られているのですが。」

と教えてくれた。

カール・リンポチェは真剣に教えてくださろうとしているのだった。わたしは彼の気持ちに誠意を持って応えようと、すべての予定をキャンセルしようと決心した。》

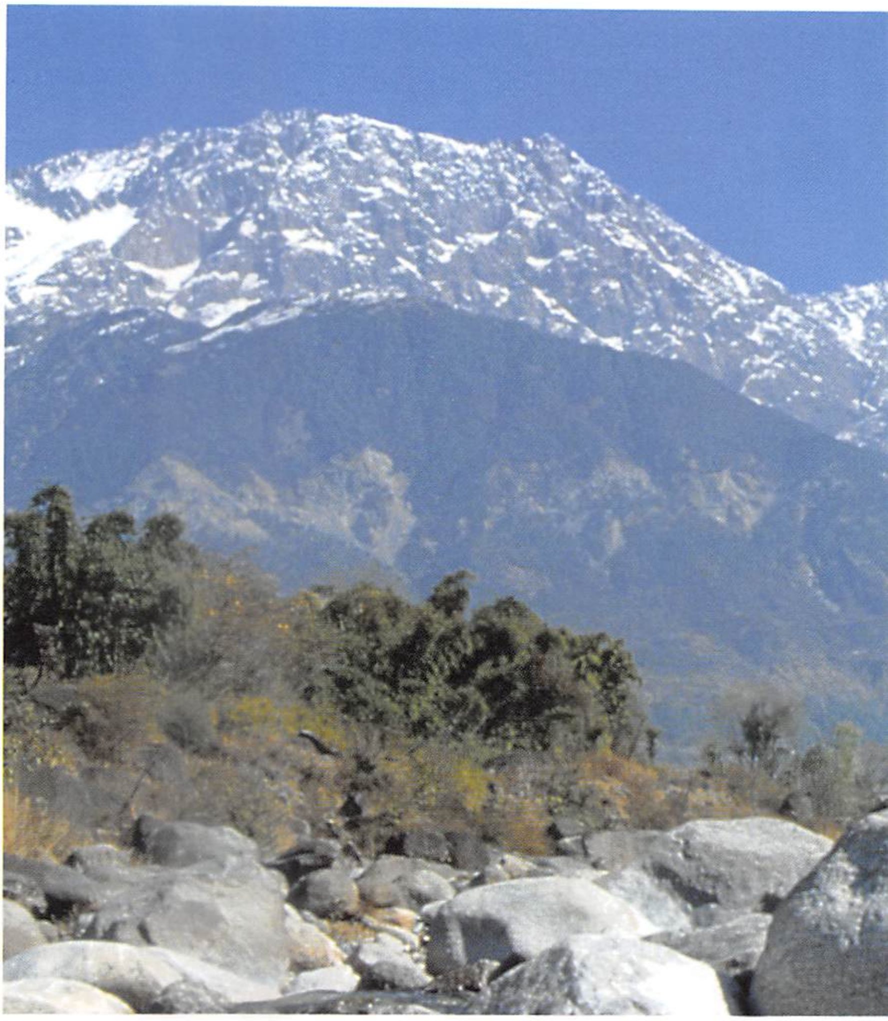
究極のイニシエーション ——ミラレパとガンポパのように

数日後、再びソナダへ。

《夕方、ダージリンの町からお帰りになったカール・リンポチェとお会いすることができた。しかし、その日はチベット語から英語への通訳がおらず、教えは明日からスタートということになった。わたしたちは、この日からしばらくの間、ここに滞在することになる。》

《第一日目、わたしがカール・リンポチェのヴィジョンを見たがゆえに、その教えを請うべく彼を探したことを伝えると、彼はわたしと同じようにグルを探し求めたガンポパの話をしてくれた。グルであるミラレパからカギュ派の教えを受け継いだ、あのガンポパのことである。

ガンポパは高い学識のある偉大な僧で



あった。多くの僧とともに僧院で生活をしていた。

ある日彼は夢を見た。夢には白い木綿の服を着た男が出てきて、それが妙に気になった。他の僧にこの夢の話をしても、誰も真剣に聞いてはくれない。「それは悪魔だ」とか、「そんなのは何でもない。気にするな」などというばかりであった。

しかし、夢の中の男のことは、ずっとガンポパの心に残っていた。あるとき、ポーラと呼ばれる儀式の最中に、ガンポパは三人の乞食が話しているのが耳に入ってきた。

その中の一人の乞食は、とてもお腹が減っていたらしく、パンの話をしていた。もう一人は富に関心があってお金持ちの話をしていた。そして残りの一人はなんとこういっていたのだ。

「山奥で瞑想生活をして、トゥモの修行をしている人がいる。物に対する執着がなく、木綿の服を着ている非常に偉大な人物だ。」

ガンポパの心は、これを聞き強く動かされた。

「この人が私の夢に出てきた男に違いない。」

そう信じたガンポパは、乞食からその人物の居所を聞き出すと、すぐさま会おうとして出発した。それからというもの、三ヵ月間歩き続けて旅をして、とうとうへき地の山中の洞穴でその人物――ミラレパに会うことができた。そして瞑想指導を受けたのだという。》

明とも根本意識ともいいます。根本無痴は知性の否定であり、ありのままにものを見、心の本質を知るという術のない状態です。

人間には、五つの感覚器官（眼・耳・鼻・舌・身）の意識と混乱した意識（データに感情が入り、現象をありのままに映し出せない状態）と意識（表層意識）という七つの意識があります。

サムサーラは、この七つに根本無痴（クンシナムシェ）を加えた八つから成り立っているのです。根本無痴によって七つの意識は手足のように働いているのです。だから、根本無痴は七つの意識の王様にも例えられます。

日本にも浄水器があるでしょう。汚れを取ってきれいな水にするものです。同じように修行することによって、汚い水に当たる根本無痴（根本意識）から、綺麗な水に当たる根本的超覚醒（クンシエシェ）を分離することができます。」



「わたしたちの問題は、真我が自分自身の存在を認識しないということです。そして認識しそこなうということが無痴なのです。つまり、仏性が自分自身を認識しそこなうのが、同時発生の無痴なのです。この無痴は、同時発生の無痴（根本無痴）といわれます。それは、この無痴が真我と同時に生じて真我と一緒に存在しているからです。

本来、空性・清澄さ・自由な覚醒状態は一緒にあるのですが、無明から派生した根本無痴の働きによって、空性が崩れ去って幻影を見るようになってきます。そして、もともと自分が持っている心の清澄さを、他から与えられたものと錯覚し、変化身の働きのみを自己と錯覚してしまいます。つまり、変化身によって経験・観察しているのが自分であると思ってしまうのです。これを同時発生の無痴（根本無痴）に対して、派生した無痴といいます。

この派生した無痴の影響の下で、人は心地良い経験を好むようになり、不快な経験には嫌悪を感じるようになります。ここに欲望と嫌悪が生じることになるわけですね。これに無痴があるのですから、それら三つが貪・瞋・癡と呼ばれる三つの対立する基本的な感情となるのです。そして、この三つがすべての細かい感情の元となります。（貪・瞋・癡に加えて、それらから派生する執着・ねたみ・プライドがすべての感情のもととなる）。

サムサーラのすべての生き物は、混乱し葛藤した感情の莫大な集積を心に持っ



ています。この感情の影響で、彼らはいやしい不道徳・悪徳を行ない、その結果、動物・餓鬼・地獄、つまり三悪趣に生まれ変わるのです。

　また、人は派生した無痴が生じるとき、自己と他という認識をし始めます。人が様々なサムサーラに存在するのもその影響です。その原因となるものは、〝瞬間的傾向の不明瞭性〟で、一言でいえば無痴から来るこの不明瞭さによって覆い隠され、見えなくなってしまう、ということです。つまり、本当は自と他の区別など無意味であるのに、不明瞭性が錯覚を起こさせているわけです。

　このため、サムサーラのすべての世界で自己と他の区別が存在しています。」

「いかに根本無痴（根本意識）が悪性のもので、悪行を働かせるかおわかりになったでしょう。この悪行が不快な状態や苦に通じるのですね。特にサムサーラの三悪趣においては、根本無痴の働きが明らかに強いのです。

　これに対して善性で、人に善行を行なわさせて功徳を積ませる存在が真我です。不殺生、生命を助けるなどの善行の中でも最大の善行は法の教えを培い、それに対して信を持つことなのです。そして、サムサーラの高い世界では真我の存在と働きの方が強いのです。

　例えば、人が人生の中で施しの実践、不殺生、他の命を守るなどの功徳を積むならば、現象界の天界、アストラルの天界に生まれることができるでしょう。

　実際はここに生まれ変わることのできる多くの人たちは瞑想修行を基礎としていますが、瞑想をしたことのない人でも、功徳によって生まれないこともないからです。ただ、コーザル世界の天界の場合は瞑想が不可欠となっております。

　このように、功徳は良い結果を招きます。カルマの法則を信じる人は素晴らしい人で、仏教徒として認められます。カルマの法則に信を持てない人は、どのような宗教を信じていたとしても、仏教徒であるとはいえません。瞑想修行のカルマ（瞑想ができるだけの功徳）を持ち、それを実践するならばブッダの境地へと導かれるでしょう。

　瞑想の結果得られるだろうものは、三つの天界に生まれ変わるということです。その人の瞑想の性質によって、三つのうちのどこの天界に生まれるかということが決まります。その人が瞑想していると



きに生じてくる主な性質が至福と富であったなら、現象界の天界に生まれ変わるでしょう。もし、それが清澄さであったなら、アストラル世界の天界に生まれ変わるでしょう。そして、もしそれが空性または空性に近いものであれば、コーザル世界の天界に生まれ変わるでしょう。

　ところが、実はこれらの瞑想は欠陥のある不純な瞑想なのです。欠陥のない純粋な瞑想の結果は、ブッダの境地または菩薩の境地へ導かれなければならないのですから。

　欠陥のない瞑想といえるのは、マハー・ムドラー、ゾクチェンなどです。

　それでは、今日はこのくらいにいたしましょう。皆さん、すべての魂がブッダフッド（ブッダの境地）に到達できるように祈りましょう。」

の教えを聞くことができるのだから。普通だったら二十分くらいしか、リンポチェには会っていただけません。できるだけ長く滞在してください。」

　実際は、これらは〝一般的な教え〟の方に属し、これが終わった後で、リンポチェはヴァジラヤーナの秘密の教えを与えてくれることになっていた。ヴァジラヤーナは、もちろん認められた人しか教えを受けることはできない。》

《カール・リンポチェの弟子の一人は、わたしにこのようにいった。

「リンポチェが、今までにこのような教え方をしたことはないように思います。短い時間で、あなたにいろいろな角度から教えを伝えようとしておられるようです。」》

あなただけに、特別に……

《カール・リンポチェの教えは、このようにして毎日続けられた。チベット語から英語、英語から日本語という二重の通訳が必要であったため、大変時間がかかった。毎日午後三時から始められるのだが、薄暗くなってメモが取れなくなるような時間になることもあった。

　リンポチェの教えの時間には、西ドイツやアメリカ合衆国からリンポチェを訪ねてきた信者や、インド在住の弟子たちが聞きに集まってきて、リンポチェの部屋は身動きのできないほど満員になってしまうのだった。

　誰もが、わたしのための教えだということを知っていたらしく、何人かの人にこう声を掛けられた。

「あなたには感謝しています。あなたのお蔭で、こんなにたくさんのリンポチェ



最高の祝福

約束された出会いの直後の八八年八月、オウム真理教富士山総本部道場の開設記念式典の場に我々はカール・リンポチェ師の姿を見ることができた。

八十歳を越えるご高齢であるにもかかわらず、寸暇を惜しんで世界を駆け巡っていらっしゃった師は、二人の弟子に支えられながら自らの足で入場された。花束の贈呈を受けた師の手足は、高齢のため震え、声はつぶやくほど小さくかすれていたが、そこからは、すべての魂に向けられる限りない愛と、威厳を感じ取ることができた。大乗の修行者の素晴らしさを、改めて実感させられたような気がする。

「すべての生き物、それはわたしたちの両親であり、その数は無数に等しく全宇宙にあまねく広がっているものです。皆さんがこの講話を聞き、そして、その後修行を行なうことによって、彼らが完全なる解脱を得、仏陀の境地に至れるように。この菩薩の心を培いながら始めましょう。」

チベット語から英語、英語から日本語への二重通訳を通しての説法は二時間に渡って続けられたが、人々の熱気あふれる中、一言も聞き漏らすまじと、参加者は熱心に聴き入っていた。

カール・リンポチェ師はさらに続けられた。

「この素晴らしいセンターの道場開きということで、皆さんの偉大なグルに、このヴァジラとベルを良い縁起の印として、差し上げたいと思います。そして、この白いスカーフ、これもプレゼントしたいと思います。これはチベット人にとっては非常に大切なもので、特に偉大なグルや人物に会うときに必ず渡されるものです。皆さんの偉大なグルが長いこと生きられ、いかなる病にもかかからず、非常に

多くの生き物たちのために教えを説き、偉大な救済活動をなさることを祈って、この特別なスカーフを差し上げます。これは絹でできていて、朝、昼、夜と、すべてに縁起がいいように、すべてが三宝の祝福によってうまくいきますようにという意味のチベット語が書かれています。」

説法の後、麻原尊師に贈り物が手渡された。そして、カール・リンポチェ師は自らの手で、尊師の首に祝福のスカーフをお掛けになった。ともに聖なる道を歩む二つの魂。彼らの絆は生死を越えて続いていた。

「今生のわたしたちは大きな好運に恵まれています。それは仏陀が現われて法を説き、その法が今なおここに存在している時代に、わたしたちは転生したからです。

さらに、皆さんは偉大な仏教の師に巡り合い、教えを受けています。それは皆さんのグル、麻原彰晃尊師です。

もし、皆さんがこの機会を利用して、法を修行し、解脱を得なかったならば、将来、数知れない未来世においても再び同じような法に巡り合い、師に巡り合うことは難しいでしょう。」

最後に師はこうおっしゃり、最高の祝福の言葉を贈ってくださった。

「真理に供養することは、最高の布施である。」



無言の対話

八九年五月、カール・リンポチェ師は真理の法則の伝播に捧げられたご自身の肉体を捨てられた。このときも異世界を通じて麻原尊師に別れを告げにやってこ

られるなど劇的なエピソードがあったが、ここでは詳細は割愛させていただくことにする（興味のある方は弊社刊『麻原彰晃のザ・サマディ』A４変形判オールカラー定価一二〇〇円参照のこと）。

　カール・リンポチェ師の死を察知した麻原尊師は、事実確認ができないままにソナダに向かった。そして、海外からの弔問客のだれよりも早く、最後の別れを行なうことになる。

《わたしは秘書に案内されて、生前リンポチェ師が使っていらした部屋へ入った。正面の、かつてリンポチェ師のベッドが置かれていた場所が、飾り付けられて祭壇のようになっていた。そこには縦に長い箱が置かれ、箱の中心には、カール・リンポチェの写真が飾られている。その箱の前には、供物を並べるテーブルがあり、果物やお布施のお金が供えられていた。ここにも一枚、リンポチェの写真が置かれていた。どちらの写真も、柔らかい、穏やかな微笑を浮かべたものであった。

　窓を背にして祭壇に向かい、リンポチェの弟子の高僧が二人、経典を経典台に置いて読経している。入り口の方にも何人かの僧が座っている。

　わたしは祭壇の正面に座って手を合わせた。すると、正面の箱に飾られた写真の方向から、懐かしいリンポチェのエネルギーが流れてきた。そして、わたしは無言のうちにリンポチェと対話をしたのだった。

　最初、リンポチェは悲しんでおられた。わたしがリンポチェの最期に間に合わなかったからだろう。しかし、話していくうちに、リンポチェの悲しみはなくなった。また、リンポチェは空の瞑想の段階を終え、次の転生の準備を始められていた。》

《わたしはリンポチェ師の魂が次の世界へと転生していったのを見届けてから、ソナダを後にして山を降りていった。出発のとき、秘書夫婦が、リンポチェ師が生前お召しになっていらしたという僧衣と、小さなストゥーパをわたしに手渡した。この二つのリンポチェ師の形見は、今わたしの瞑想室の祭壇に置かれている。》

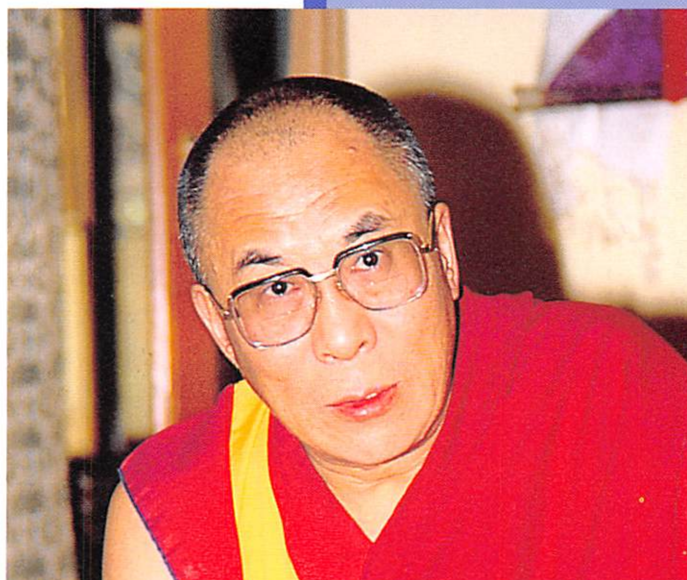
再び会えるその日まで

《偉大なグルであられたカール・リンポチェ師は、その波瀾に満ちた生涯を異郷の地で閉じた。彼の遺した翻訳事業をはじめ、数多くの業績は、これからも人々を真理へと導く助けとなってゆくことだろう。そして、リンポチェ師の魂は生まれ変わって再び救済活動を始めるのであろう。

　わたしは、カール・リンポチェのリインカネーション（生まれ変わり）と巡り合うことができるだろうか？　いや、いつの日か巡り合えることを信じたい。》

最高の聖者の最高の祝福





一九五九年、中国軍のチベット侵略を逃れるために祖国を捨てざるを得なかったチベットの人々は、インド北西部のダラムサラの地に亡命政府を築き、長い伝統を誇るチベット仏教、チベット文化の継承の地をつくりあげた。このチベット仏教の政治・宗教の最高実力者がダライ・ラマ法王である。宗教に関心がない人でもこの方の名前ぐらいは知っ

チベット仏教の政治・宗教の最高実力者、

ダライ・ラマ法王

H.H. Dalai Lama

「わたしはいつも君を祝福し、見守っているから」

ているはずだろう。

実はこのダライ・ラマ法王も麻原尊師のよき理解者であり、尊師を称賛する聖者の一人である。一九八七年に初めてお会いになって以来、ダライ・ラマ法王は「日本に真の宗教を広めなさい」と麻原尊師に様々な秘儀を伝授。一方、麻原尊師もチベット仏教を守るために、亡命政府にできる限りの援助を行なってきた。両者の友好の印として、八九年五月にはダライ・ラマ法王並びに法王庁から親書も寄せられている。

それはともかく、麻原尊師のステージの高さを認める最高の聖者は、これまで何度となく最高の祝福を与えてくださった。



不思議な出合い

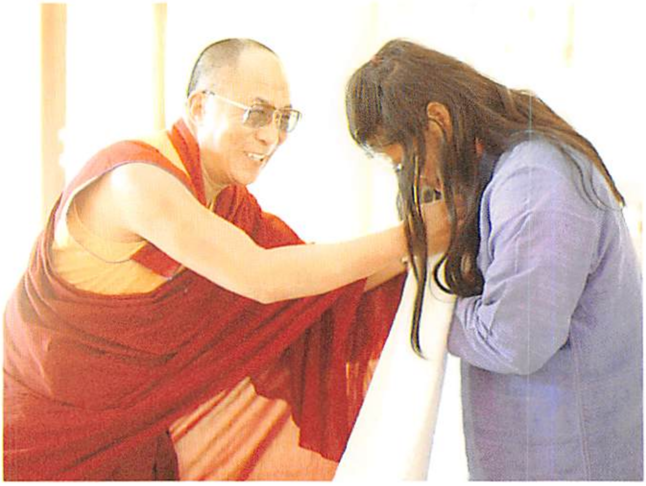
二人の関係は出会いからして不思議な、特別なものだった。八七年二月、ダラムサラを訪れた麻原尊師は、ひょんなことからダライ・ラマ法王との個別謁見という素晴らしい機会を与えられることになった。

　ちょうどこの時期、法王をはじめとして多くの高僧たちはサキャ神賢（釈迦牟尼）が大いなる覚醒を果たされた、聖地ブッダガヤーを訪れていて不在中。二つの魂が出会う要素など毛頭ないように思われた。それが運命的とも思える出会いを果たすのだから、ダライ・ラマ法王と麻原尊師の出会いは、まさに神々に祝福されていたとしかいいようがない。

　このときのダラムサラ訪問で、山中で瞑想する二人の高僧にお会いになった麻原尊師。そのステージの高さに驚いた二人の高僧は、修行法の伝授を求める麻原尊師の要望に首を横に振り、こう語ったのである。

「残念ながら、わたしたちはあなたにイニシエーション（秘儀伝授）を与えることはできません。

　あなたは、ダライ・ラマ法王にお会いしなさい。法王は素晴らしい方です。あなたに直接イニシエーションを与えるか、またはイニシエーションを与えることのできる、ステージの高い僧を教えてくださるはずです。」





　そしてその結果、こうした著名な高僧の推薦で、「予約もなしに、法王がダラムサラに戻り次第お会いできる」という特別な個別謁見が実現したのである。ダライ・ラマ政庁文化局のカルマ・ゲーリック師もさすがに驚きを隠せない様子で、「これは特別なケースだ。ラッキーだ」と何度となくこう語っていたのが印象的だった。



「仏陀のイメージを与えよう」

観音様の化身として初代ダライ・ラマ法王がこの世に生を受けたのが一三九一年。以後、生まれ変わりを予言して肉体を離れ、生まれ変わっては法王の位につくことを繰り返してこられた聖なる魂は、現在「十四世」と呼ばれている。さすがに活き仏といわれるだけあって、慈愛に満ちあふれているお方だった。

初めての対面を謁見室で行なったダライ・ラマ法王と麻原尊師。独学の修行で高いステージまでたどり着いた修行経験に興味を示された法王は、麻原尊師を認め、特別にイニシエーションを授けてくださった。この直後、なんと舞台を法王の住居に移し、記念すべき謁見は意外な方向へと展開していったのである。

そのときの様子を麻原尊師は次のように書かれている。



《ダライ・ラマ法王のご住居に招かれて、そこでわたしが何を体験したのかお話しよう。

なんと、わたしはダライ・ラマ法王とともに瞑想することができたんだ。それも、法王のプライベートな瞑想室で。

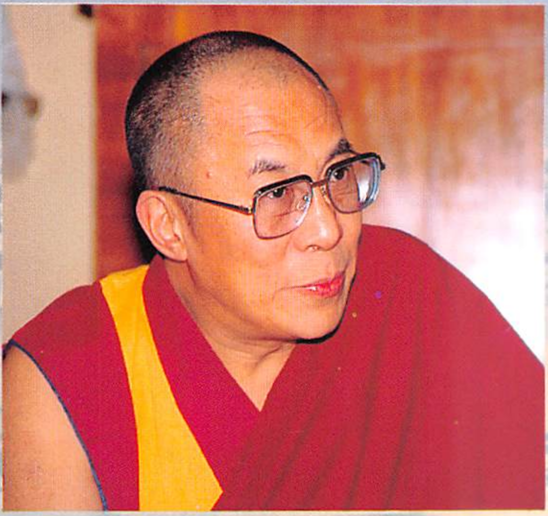
法王は、ご自分の仏像コレクションを見せてくださったあと、瞑想室に誘ってくれた。

「わたしはいつものところに座るから、君はここに座りたまえ。仏陀のイメージを与えよう。」

わたしは何をどうしたらいいのかわからないまま、とにかく示された場所で蓮華座を組んだ。そして法王に精神集中をしてみた。

ダライ・ラマ法王は、二～三分荒く大きな呼吸をしていたかと思うと、スッとその気配が消えた。おそらく、呼吸も停止しているのだろう。

それと同時に、黄金の釈迦牟尼の顔のアストラル・ヴィジョンが、わたしのアー



ジュニァー・チァクラに広がった。釈迦牟尼の顔は、まったく揺らぐことなく見え続けた。

「ああ、法王はこのことをおっしゃったのか。」

わたしはそのまま瞑想を続けた。この出来事はわたしのアストラル界に仏陀を住まわせることを意味しているのである。それによって、わたしの潜在意識は仏陀と同一になるはずなのだ。

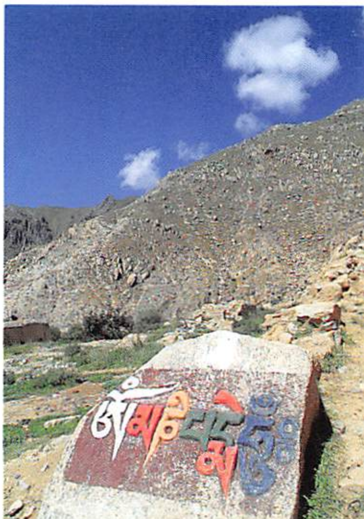
現に、帰国した後、わたしは自分自身が三つの点で大きく変化したことに気づいた。

まず、わたしの意識がよりいっそう、大乗の仏教に近づいたということ。大乗の仏教とは、自己の悟りだけでなく、他の人たちも最終世界に導く方法を持った教えである。》

《ところで、瞑想を終えた後、法王は大声でなにやらしゃべりながら（チベット語だったので、わたしにはわからなかっ







たが）、ずらりと並んだガラス扉の棚から何かを探しはじめた。そして、ようやく一体の仏像を手に取られた。

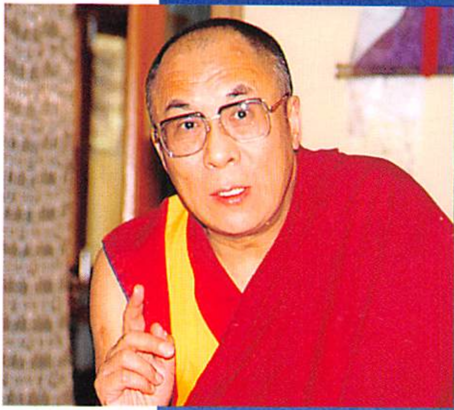
「釈迦牟尼だ。これをあげよう。」

　そういって法王がわたしにくださった仏像は、わたしが瞑想中に見続けていたあの黄金の顔をしていたのである。

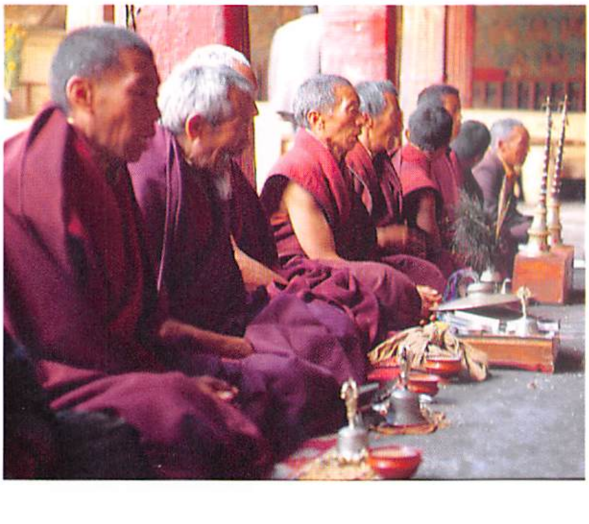
「わたしはいつも君を祝福し、見守っているから。」

　法王は、四回もわたしを抱きしめてくださった。》

　故国を離れ、異国の地で伝統的チベット仏教を守られる最高の聖者ダライ・ラマ法王。そのチベット仏教を真摯な態度で学ぶ麻原尊師との交流は、今もなお続けられている。

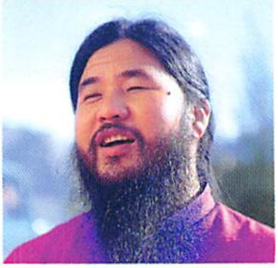








ステージの高さを絶賛



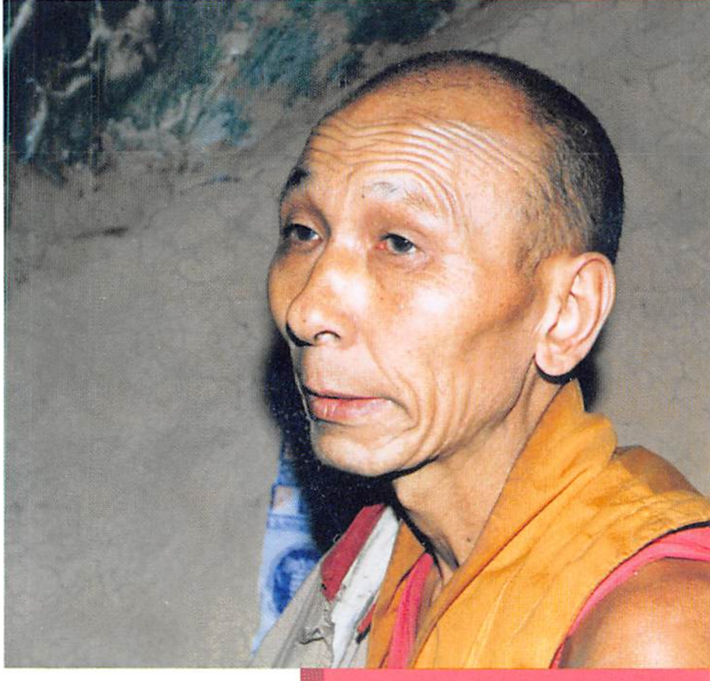
「ダライ・ラマ法王にお会いしなさい」

一九八七年二月、ダラムサラの山中で二人の高僧が瞑想修行を行なっていた。

それがジャンパル・テンジン師とロブサン・テンジン師である。この二人の高僧こそが麻原尊師にダライ・ラマ法王との謁見を勧められた方々だったのである。

ジャンパル・テンジン師はチベットのゲールク派の仏教大学で学んでいるとき





チベット仏教、無上の修行者　　　　　　　　（熱のヨーガ）の成就者

ジャンパル・テンジン師＆ロブサン・テンジン師

Jampal Tenzin/Lobsang Tenzin

中国軍の侵略にあってインドの地に亡命。以後、独力で勉強と瞑想を続け、当時はアヌッタラ・ヨーガ・タントラのキュレムのレベルを修行中といわれていた。

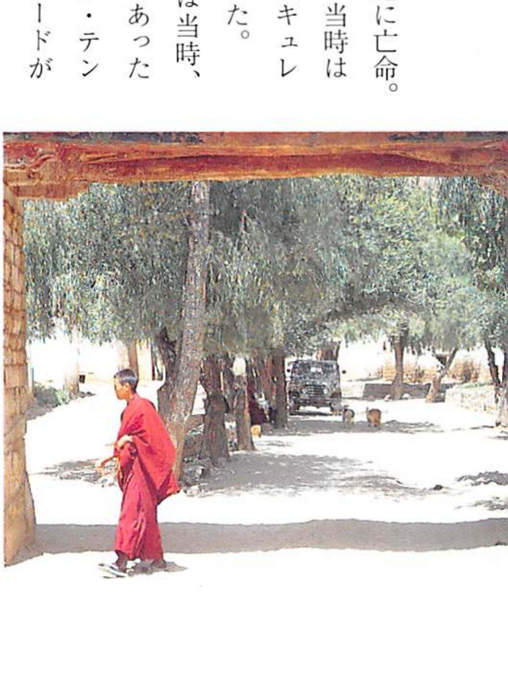
一方のロブサン・テンジン師は当時、ゾクリンのギョル段階を修行中であったそうだ。ところで、このロブサン・テンジン師にはこんな面白いエピソードがある。

アメリカのハーバード大学で科学的なチェックを受けたロブサン・テンジン師。トゥモの行を行ない、なんと体温を平常値より十五度も上昇させたという（ちなみにこのとき呼吸は停止していたそうだ）。つまり、人間の体温が五十度を超えたというのである。にわかには信じ難い話だが、前出のダライ・ラマ政庁宗教文化局のカルマ・ゲーリック師もこの実験に立ち会って事実であると証言している。聖者たちの底知れぬ〝力〟にはいまさらながら驚かされる。

さて、麻原尊師との会見でそのステージの高さに驚き、ダライ・ラマ法王との謁見をバック・アップしてくださった二人。実はこのとき、最終解脱直前の麻原尊師に大いなる覚醒への重要なヒントを与えてくださったのである。

「あなたの体験を聞いて、あなたが今どれだけ高いレベルに到達されているのかよくわかりました。わたしたちの経典にそのレベルの記述がきちっと書かれているからです。」

この二人の聖者もまた、麻原尊師の力を認めバック・アップしてくださった、よき協力者だった。




ない幸せなど、


心の豊かさがともなわ
やはり幻影にすぎない
Happiness that does not make you rich at heart
is only an illusion.



アストラルのグル

人間のグルを持たずに最終解脱の偉業を成し遂げた麻原尊師。霊視によって最終解脱までのステップが確認できるように書かれているヨーゲシヴァラナンダ師の著書、『魂の科学』（たま出版刊）は、そんな麻原尊師の修行を進める上で大いなる導きの書になったそうだ。このお二人は直接の面識はないものの、二つの魂の間には不思議な縁を感



傑出したヨーギ、

故ヨーゲシヴァラナンダ師

Yogeshwaranand

「全宇宙のエネルギーがあなたに味方している。わたしが指導しよう……」

じさせるこんな話が伝えられている。

そもそも麻原尊師が『魂の科学』に目を通すきっかけとなったのは、一九八六年九月、ヨーゲシヴァラナンダ師のヴィジョンが突然現われたことに起因していたというのである。このとき麻原尊師は聖者が亡くなったと感じたそうだが、同時に、一般の教典の最高レベルに到達し行き詰まっていた時期でもあり、『魂の科学』を読む時が来たと感じた、という。その結果、再び順調にステージを上げられていったというから、これだけでもまさに「ヨーゲシヴァラナンダ師は麻原尊師のよきグルであった」といっても過言ではあるまい。

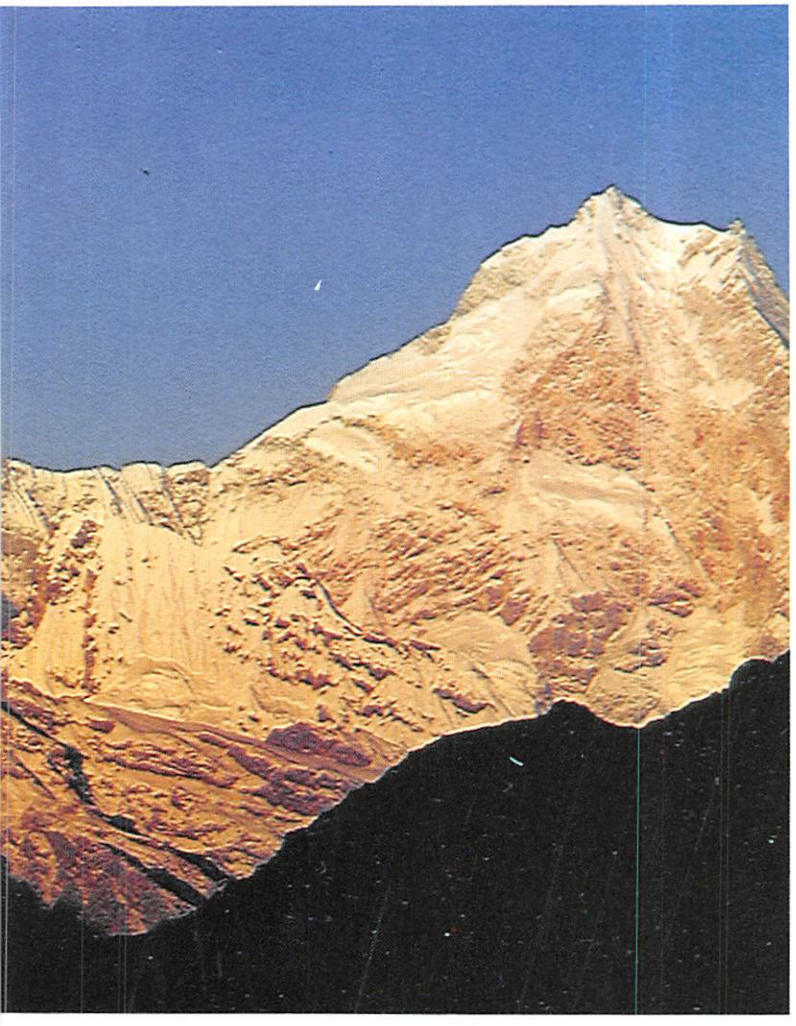
以来、「感謝と敬愛をもって聖者ヨーゲシヴァラナンダ師を魂の指導者として慕っている」と語る麻原尊師。だが、二人の接点はこの限りにあらず、もっと深い、そして大変不思議なエピソードが残っている。



修行者の町、リシュケーシュで

聖河ガンジスの上流の聖地ハリドワールからさらに二四キロほど上ったリシケーシュ。川の両側に寺院やアーシュラム（修行場）が建ち並び、オレンジ色の僧衣をまとった修行僧の姿がやけに目立つ、修行者の町である。

ヨーゲシヴァラナンダ師のいらっしゃるヨーガ・ニ・ケタン・アシュラムは、ビートルズのジョージ・ハリスンが修行に訪れたことから一躍〝ヨーガの町〟として世界的に知られるようになったこのリシケーシュにあった。



まだ最終解脱を果たす以前、インドを訪れた麻原尊師は、「なぜか聖者のヴィジョンが見えない」と一抹の不安を抱きながらも、ヨーゲシヴァラナンダ師のいらっしゃるはずのヨーガ・ニ・ケタンを訪ねたのである。以下はそのときの、大変興味深い記述である。

サマディに導かれて……

《夜遅く風雨の中、わたしたちはずぶ濡れになって、ヨーガ・ニ・ケタンまでたどりついた。道場内は自由に出入りできるので、わたしは自分を呼ぶヴァイブレーションの出ている方角を、目指した。弟子たちは何も感じないらしかったが、わたしは強いヴァイブレーションを感じ続けていた。

「あの建物から、ヴァイブレーションが出ている。ヨーゲシヴァラナンダ師がおられるにちがいない。」



建物の内部に入ろうとすると、鍵がかけられていた。わたしは、だれかを探すよう弟子に指示した。すでに夜九時を過ぎていて、あたりは真っ暗だったが、幸いにも一人の日本人ヨーガ愛好者を見つけることができた。彼はいった。

「聖者は九月に亡くなられました。」

……そうだったのか。わたしが姿を見たとき、やはり聖者は亡くなられたのか。残念だ。もっと早く来るべきだった。

「しかたがない。出直そう。」

三日後、私たちはふたたびヨーガ・ニ・ケタンを訪れた。そして、聖者の後継者であるグルに、わたしが聖者の信奉者であることを伝えた。彼はわたしたち一行を、聖者のサマディへと案内してくれた。

サマディ?

なんとそれは、前回訪れたときに強力なヴァイブレーションを発していた、あの建物だったのである。墓に眠りながらも聖者は、巨大なエネルギーとして存在し続けていたのである。

内部へ招き入れられたわたしは、弟子たちに後へ下がるようにいい、等身大の聖者の像に向かって、修法をはじめた。マントラを唱えると、とめどなく涙が流れ落ちた。

「この世で生きているうちに、お会いしたかった。いつまでも、導いていただきたかった」

涙につまってマントラが途切れたとき、聖者ヨーゲシヴァラナンダが現われた。

「わたしがこれからあなたを守護し、指導してあげよう」

聖者は、こうわたしにいわれた。

「あなたの最終解脱は遠いことではない。全宇宙のエネルギーが、あなたを味方している。わたしが指導しよう……」

それからしばらくのあいだ、わたしは聖者と話をすることができた。わたしが



笑うこともあった。まわりの人間は、きっと変に思ったことだろう。

ただ、後継者のグルだけは、聖者とわたしのアストラル体での会話を、知ることができたらしい。Y君がこういっていた。

「わたしはあのグルを知っていますが、あんなに冷静な人が目を赤くしていました。とても信じられないことです。」

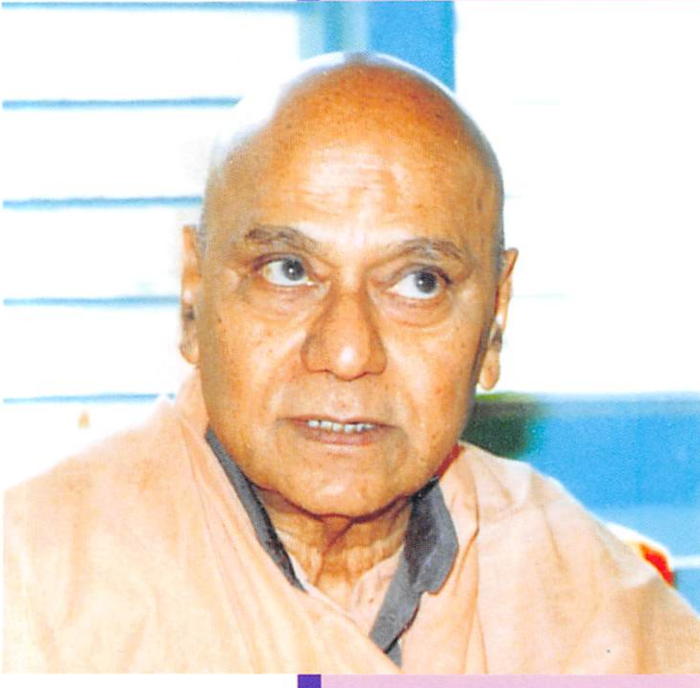
このようにして、聖者ヨーゲシヴァラナンダは、わたしの最高霊界のグルになってくださったのである。》

これもまた聖なる魂ならではの時空を超えたドラマなのだろう……。



霊的パワーを秘めた秘儀を伝授







リシケーシュ最大のアシュラム、シヴァナンダ・アシュラム。ここの最高指導者、最高実力者と称されているのが、スワミ・チタナンダとスワミ・クリシュナナンダである。

彼らも麻原尊師の理解者であり、尊師がヨーガ・ニ・ケタン・アシュラムを訪れたとき、強力な霊的パワーを秘めたマントラを伝授してくださったりした。

まずは最高の指導者と称されるスワミ・チタナンダから。麻原尊師がシヴァ大神を信仰しているというと、スワミはすぐ

リシケーシュの実力者、

スワミ・チタナンダ & スワミ・クリシュナナンダ

Cidānanda/Kṛṣṇananda



にシヴァ大神を称えるマントラを惜しげもなく伝授してくださった。

「ガンバルバー・ナマハ・ガンガルビュー・ナマハ・サラスヴァッティ・ナマハ」

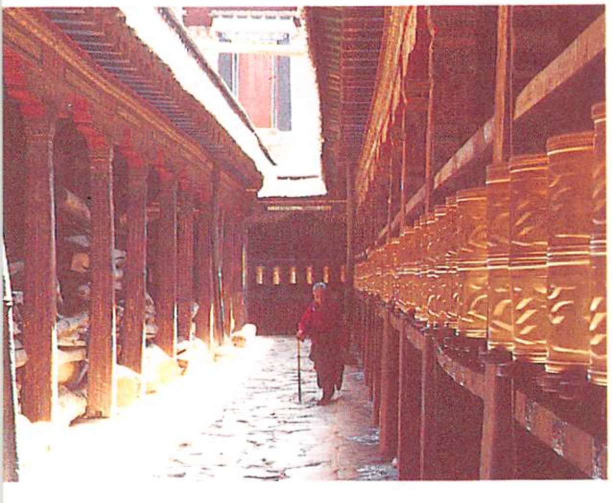
　これを三回唱えた後、独特な持ち方で数珠を持ち、次のマントラを唱えながら一回ごとに数珠を一個送っていくのだと、数珠の使い方まで丁寧に教えてくださった。

「オウム・ナマ・シヴァ・ヤ」

　一方、地元でナンバー・ワンの聖者といわれるスワミ・クリシュナナンダ。念のパワーのすごさを感じさせたこの聖者は、麻原尊師に「オウム」のマントラを伝授してくださった。

〝ウ〟音をのどに響かせて、〝ム〟音をハミングさせ、自分がどんどん広がっていき、最後には宇宙と一体化するように意識をもっていくのだそうだ。

　麻原尊師のステージを認め、丁寧にマントラを教えてくださった二人の聖者。このマントラが麻原尊師自身の修行、さらには弟子たちの霊性の向上に大いに役に立ったことはいうまでもない。



白銀色の光に満ちた聖者が贈った最高のアドバイス





ガンゴートリー、ヤムノートリー、バドリーナート、ケーダールナートなど、いわゆるウッタラーカンド（北方の地）と呼ばれるヒマラヤの聖域への入口、それがウッタルカシという町である。功徳の光に包まれた聖者、スワミ・アカンダナンダはこのウッタルカシにいらっしゃった。実は彼は傑出されたヨーギ、かのラーマ・クリシュナ・パラマハ

功徳の聖者、

スワミ・アカンダナンダ

Akhandananda

「あなたには特別な義務がある……」

ンサの孫弟子にあたる。

かつては何年もの間、聖山ヒマラヤにこもって瞑想修行されていたスワミ・アカンダナンダ。ところが、あるときグルにこの地に呼ばれ、「サンスクリット・カレッジを継ぎ、インド人に奉仕せよ」との言葉に従い、以来十数年間この地で奉仕を続けていらっしゃるそうである。

麻原尊師がまだ最終解脱を果たされる前、このスワミ・アカンダナンダは尊師に対して最高のアドバイスを送られた一人である。





「何の前ぶれもなく、わたしは深い瞑想に入れられた」

スワミ・アカンダナンダと麻原尊師が会われたのは、最終解脱以前のことだった。ここで尊師は彼によって不思議な体験をさせられることになる。なにはともあれ、まずは当時の記録を振り返ってみよう。

《聖者アカンダナンダにお会いして圧巻だったのは、なんといってもわたしが深い瞑想に入れられたことである。何の前ぶれもなく相手を瞑想に入れ、異次元へと連れていく。信じられないパワーである。

しかも、この日は二度目の訪問であった。後に詳しく述べたいが、前日知った聖者の功徳のエネルギーに感激し、翌日も無理をいって会っていただいたのである。「今日は、聖者アカンダナンダのエネルギーを完全に受けたい！」とわたしは強く願っていた。

そこで、聖者の質素な庵（小さな部屋）に招き入れられると、聖者に礼拝したままエネルギーを受け続けようと努めた。聖者もそれに気づいたに違いない。静かな空気が流れた後、わたしのアストラル体に変化が起こり始めたのだ。アストラル体が無限に感じるほど拡大していった。どこまで広がるのだろう、と思っていると、限界に達したらしく、それが止まった。かと思うと、今度は縮小し始めたのだ。

この拡大と縮小が三回繰り返されたとき、わたしの魂は異次元へと放り込まれた。すぐそばで同じように礼拝していた二人の弟子も、異次元へ連れていっていた。同行した五人の弟子のうち、この二人だけを連れていった。無意識にやったことであるが、おそらくこの二人が他の人に比べてバクティ・ヨーガの修行が進んでいたからだと思う。バクティ・ヨーガとは、神とグルを信仰し、神の意思を実行するヨーガである。そして、聖者もわたしもバクティ・ヨーガの実践者であった。

わたしは異次元で、彼らに宗教上の話をしていた。それはほんの数分くらいにしか思えなかった。しかし、あとで三十分もの時間が経過していたことを知った

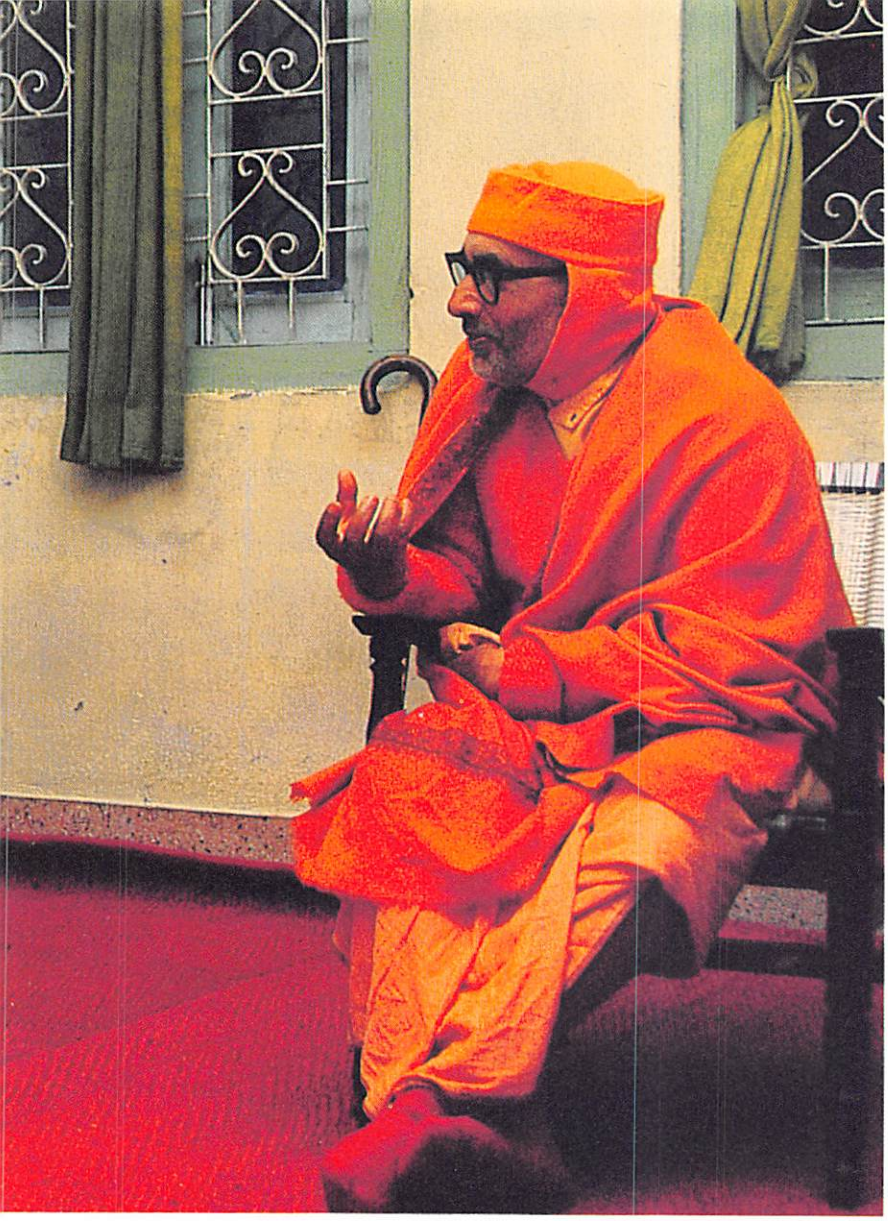
のである。
わたしの魂は、やがて肉体へと戻った。
さて、弟子たちはどうしただろうか。わたしが顔をあげ振り返ったとき、異次元へと行っていた二人も相次いで顔を上げたのだった。
目の前で聖者はいつものように白銀に輝く静かなエネルギーに満ちあふれていた。》

麻原尊師が常日頃から説かれている功徳の重要性に改めて思い知らされるようなエピソードである。

最終解脱へ向かって

ところで、このスワミ・アカンダナンダは折しも最終解脱直前にあった麻原尊師に、大いなる覚醒のヒントを与えてくださった。以下はそのときのお二人のやり取りである。





――最終解脱にいたるためにはどのくらいかかるのでしょうか。

「あなたには特別な義務があるから、二年半以内に修行は完成するでしょう。まもなく、あなたの身体の内側から、あなたを導く声が聞こえてくるはずです。」

――特別な義務とは何を指すのでしょうか。

「日本人を高い精神状態へ引き上げることです。」

――最終段階、最終解脱とは、どのような状態を得ることでしょうか。

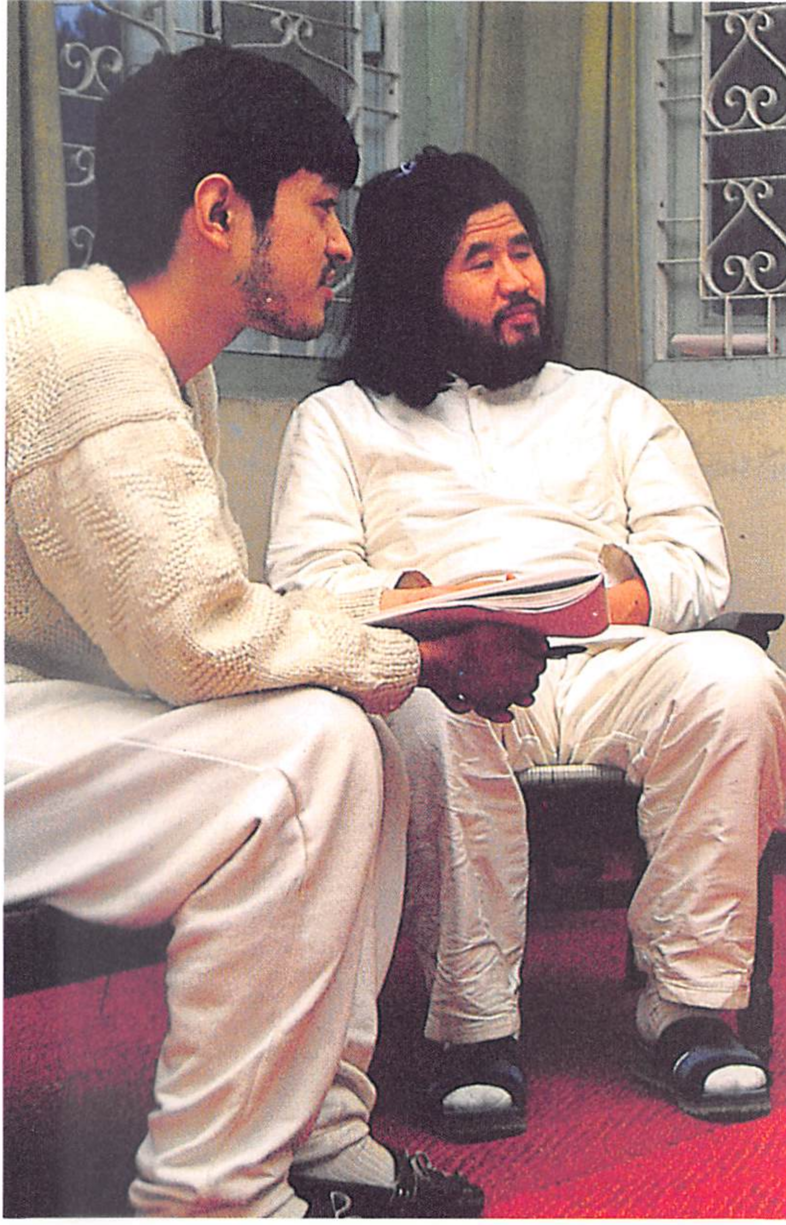
「それは、絶対幸福の状態です。すべての枠組みはなくなり、だれに対しても愛の目を向けることができるのです。」

――最終解脱のための助言を与えてください。

「なぜ聖者がヒマラヤへ行くのか考えてみてください。それは素晴らしい山のヴァイブレーションを受けることができるからなのです。

　だから、あなたもヒマラヤへ入ること、それが一番いいと思います。もしそれが不可能だったら日本で修行してもよいでしょうが、その場合はとにかく静かなところで完成させなければなりません。」

　当時常に多忙を極めていた麻原尊師がこの地を訪れたのも、おそらく最後の覚醒のための修行の一環なのだろう。そこでこのような聖者から最高のアドバイスを与えていただけるわけだから、やはり二人の出会いも神々に祝福されていたものに違いない。



日本人へのメッセージ

ところで、余談ではあるが、このときスワミ・アカンダナンダは我々日本人に対してこんなことをおっしゃっていたので、ここに併せて記しておこう。

「日本人は働き過ぎていると思います。人によっては一日に十時間にも及ぶ仕事をしている。それではとても、自分を見つめる時間がありません。

仕事は、最小限生きていくためにするものです。決して出世のためとか豊かな生活のためではありません。

もっと自分を見つめるために時間をつくってください。霊性を高めるのです。そうすることが魂を進化させ、そういう生き方をした者だけが、死んだ後も次元の高い世界（天界）や、より高い世界（解脱）へといくことができるのです。

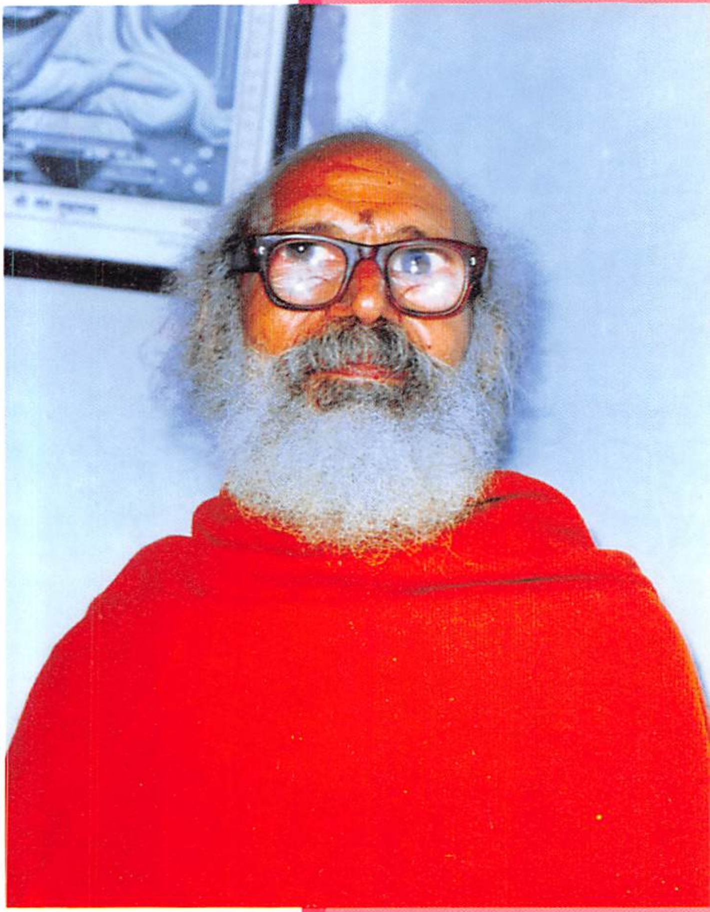
そして、修行でなく普通の生活をしている人は、親、兄弟、友人、同僚、それだけでなく見ず知らずの人に対しても、慈愛をもって接するように努めてください……。」

まだ最終解脱をされる前、二日間に渡ってスワミ・アカンダナンダにお会いになった麻原尊師は、心を残しながらこの聖者に別れを告げた。

スワミ・アカンダナンダは麻原尊師に同行していた我々に対して、最後にこう語ってらっしゃった。

「あなたたちは大変幸せな人たちだ。正しい教えに目を向けることができるのですから——。」

"シャクティーパット"を絶賛





突然の花輪の祝福

ラーマ・クリシュナ寺院で会ったスワミ・ビハール・マハラジは、七年間アーサナと瞑想を続けて解脱を得た方である。この方は麻原尊師に特別な瞑想法を伝授してくださったが、この際、スワミから紹介されたドイツ人青年に麻原尊師がシャクティーパット（解脱者が直接相手の体に触れてエネルギー移入を行なうもので、

スワミ・ビハール・マハラジ

Vihar Maharaj

イニシエーションの中でも最高の部類に入るもの）を施されるのを見て大変感激されていた。

常々から「シャクティーパットの効果は一種の暗示ではないか」との疑いの声を耳にしていた麻原尊師。ある種、実験のつもりでこのドイツ人青年に何も告げずにシャクティーパットを施してみようと考えられたわけである。

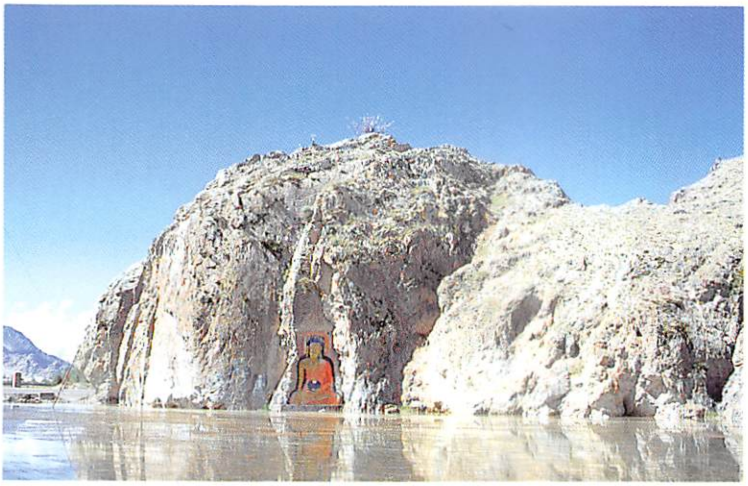
その結果は、

「虹色の光が見えました。ものすごく心地よくなって、身体が動かなくなってしまった。エネルギーが尾てい骨から頭頂に向かって昇っていきました。」

彼の言葉は、これまでシャクティーパッドで受けて側が語っている体験そのままであり、シャクティーパットが暗示ではないこともここで証明されたわけである。

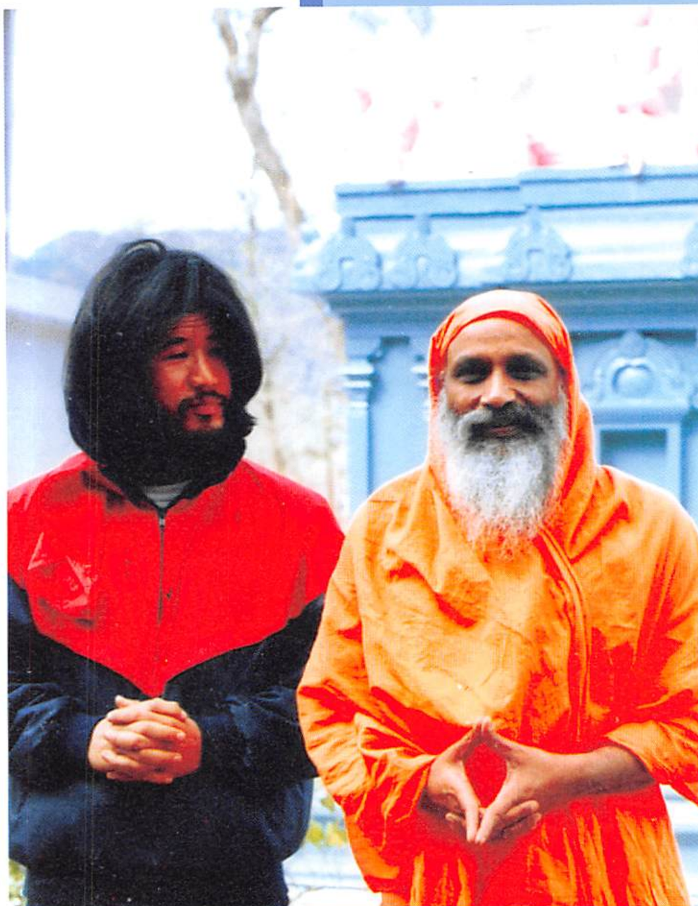
ところで、一部始終をジッと眺めていたスワミ・ビハール・マハラジは、この出来事にいたく感動。礼拝を終えて寺院を後にしようとする麻原尊師をわざわざ追いかけてきて、花輪による祝福を与えてくださった。

言葉はストレートには通じなくとも、聖なる魂にはヴァイブレーションですべてが通じるのだろう。



「グレート・ヨーギ」と心から称賛





本当の自分とは?

ダイヤナンダジ・アシュラムの指導者、スワミ・ダイヤナンダジは、インド国内はもとより、広く欧米でも高い評価を得ている瞑想とジュニアーナ・ヨーガ（哲学的ヨーガ）の指導者である。自らもジュニアーナ・ヨーガの成就者であるスワミ・ダイヤナンダジが指導するアシュラムの修行者は、半数以上が外国人であるとい

スワミ・ダイヤナンダジ

Dayananda

う。このことからもスワミが海外で高い評価を得ていることをうかがい知ることができる。

さて、麻原尊師がこのアシュラムを訪れスワミ・ダイヤナンダジに会われたときである。スワミとの間にこんなやりとりがあった。

「例えば、男優がいたとします。彼は劇場では役割を演じる。しかし、家では夫であり、親である。それが本当の自分の姿なのです。」

これに対して、すかさず麻原尊師がこう切り替えした。

「それは違います。家においても役割を演じているにすぎないと思います。夫の役割、父親の役割です。本当の自分とはすべての制約がなくなった段階で現われてくるものです。」

これにはスワミ・ダイヤナンダジもびっくりされたようだ。なぜならスワミは、順を追って話そうと、「家にいる姿は本当の自分」とあえて誤った見方を示してからそれを覆そうと考えていたのだが、自らが用意していた結論を瞬く間に説かれてしまったからである。



「グレート・ヨーギ」

スワミ・ダイヤナンダジは、麻原尊師を心から称賛されていた。スワミもまた麻原尊師の〝力〟を見抜いた聖者であった。

「自然があなたを必要としている」





「あなたは日本を救うことができる」

日本でも有名な超能力者、パイロット・ババ。かつて彼が見せたサマディ（限られた酸素量の中で数日間を過ごすというもの。解脱者が深い瞑想に入るときに起こる呼吸停止を証明するものである）は日本のテレビにも取り上げられたことがあり、ご存じの方も多いことと思われる。このパイロット・ババもまた、麻原尊師

超能力者、

パイロット・ババ

Pilot Baba

のステージの高さを驚き、称賛の言葉を贈った一人である。

一九八七年夏、麻原尊師が聖山ヒマラヤの修行で最終解脱を果たされたのは周知のとおりだが、実はこのときの修行のきっかけとなったのが前出のスワミ・アカンダナンダとこのパイロット・ババの称賛といっても過言ではない。

「あなたは日本を救うことができる魂です……。」

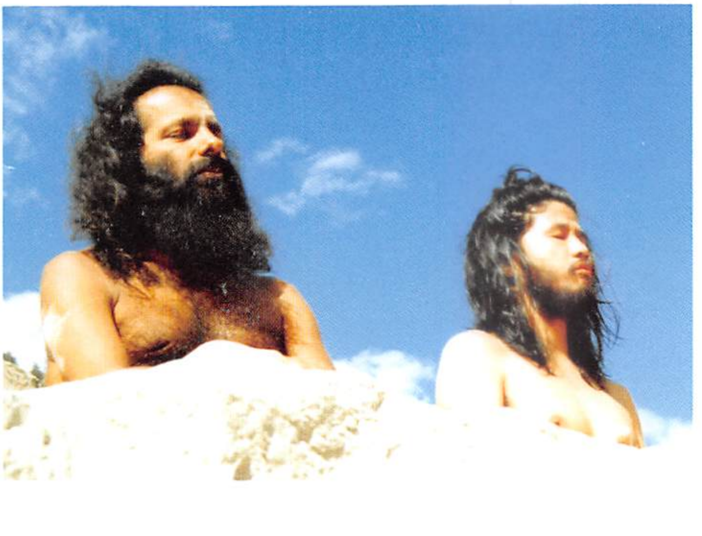
八六年二月、インド・デリーで初めて会ったとき、彼は麻原尊師に対して確かにこう語った。さらに、こうも語ったのである。

「一日に六時間瞑想したら三十日で最終解脱するでしょう。」

「あなたの寿命は最初三十六歳から四十代前半で終ることになっていた。しかし、それはすでに超えている。ヨーガの行によってそれは消滅した。あなたは六十二歳から八十歳までの間で、生きようとは思わなくなったときに自由に身体を捨てることができるようになる。

しかし、いまは死のうとしても死ねない。それは自然があなたを必要としているからだ。」

パイロット・ババの言葉どおり、麻原尊師はヒマラヤで最終解脱を果たされた。次は日本を救う番である……。



聖者誕生

絶対の自由・幸福・歓喜……、大いなる覚醒を果たされた魂は、この世界の一切の苦悩から解放された。しかし、心の奥底につかえていたある種の思いは隠せなかった。

「わたしは満足できなかった。どういったらいいだろうか。つまり、わたしだけが幸せで、他の人が苦しみの世界にいるということに耐えられなかったんだね。」

魂の輪廻転生を点でとらえるなら、欲しい物は思うままに手に入るこの〝豊かさ〟は幸せと呼べるものかもしれない。しかし、一切は無常である。人間の一生というこの短いタイム・サイクルでさえその幸福感というのは、はかなく、もろくも崩れ去ってしまう刹那の〝楽しみ〟であることは間違いない。

無始の過去からの膨大な時間を「輪廻転生」と「カルマの法則」という動か



しがたい大原則によって、地獄・動物・餓鬼、そしてこの人間界、意識堕落（阿修羅）、戯れ堕落の天界から構成されるサムサーラ（苦界）をさまよい続ける我々の魂にとってはもはや、エゴや煩悩というものを滅し、このサムサーラから心を出離させるしか本当の幸福を得られる術はないのである。

仏教の開祖、覚者サキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）をはじめとするいにしえの聖者たちがお説きになったこの絶対なる真理の法則は、一つの崇高な魂の降誕により迷妄に包まれた現代に甦った。人々を苦悩から解放させようとする慈愛に満ちた聖者の誕生とともに……。



AUM Editorial Staff 1991

オウム真理教

2600年の時を経て甦った真理がここにある！

古くから伝わる仏典やヨーガ教典によれば、
聖者と呼ばれる人々は、この世のすべてを知り尽くし、
心は常に安定し、望めばかなわぬことがないという、
いわゆる〝神〟のような存在であったという。
しかし、彼らとて最初からスーパーマンであったわけではない。
〝長く厳しい修行の後、これらの力を得た……〟
と教典は語っている。
わたしたちは、いまだ磨かれていない
ダイヤモンドの原石にたとえることができる。
この原石は、一見汚れていて光沢もないが、
洗い、削り、丹念に磨き上げることによって、

新しい〝あなた〟との出会い

**わたしたちが願ってやまない
潜在能力開発の夢を、
オウム真理教は独自の
「仏教・ヨーガ」メソッドによって
あなたに贈ります。**

光り輝くダイヤモンドにすることができるのである。
この、洗い、削り、丹念に磨き上げる作業……、
これが修行なのである。
すべてを知り尽くした最終解脱者、麻原彰晃尊師が、
数多くの技法の中から、忙しい現代人に最も適した修行法を厳選し、
あなたの内側に秘められた素晴らしい力を、
早く、しかも確実・安全に引き出してくれる。

この本をお読みになって、どのような感想をお持ちになりましたか。
あなたのご意見をぜひ下記の宛先までお送りください。

〒154　東京都世田谷区世田谷2—8—17
オウム出版『聖者誕生』読者係

◆各支部のご案内◆
富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京本部　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5 杉田村松ビル1F
新東京本部（杉並道場）03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4　井口ビル2F
大阪支部　06(397)1022
〒532　大阪府大阪市淀川区西宮原1-8-14 八光ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前2-6-15 第一渡部ビル6F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14 万国ビル3F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目19-1 チサンホテル本館2F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り松原上ル五軒町384 松本ビル2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町1-4-20 十全会ビル2F
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20 ソフトオフィスビル2+4 2F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8 安藤ビル2F
広島支部　082(264)6250
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18 和田ビル3F
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2 コスモ伊勢崎長者町ビル204
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42 和歌山酒販会館2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
埼玉出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
布施精舎　03 (3476) 5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3　プリメーラ道玄坂317号
〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hugel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany

聖者誕生
資料請求券

●資料請求について　資料請求券を添付したハガキ、または電話にて最寄りの本・支部（121ページ参照）までご連絡いただければ、入信案内等詳しい資料をお送りいたします。

笑顔の明日を予感させるライフクリエートマガジン

月刊『えんじょい・はぴねす』

Enjoy Happiness



楽しいはずの人生なのに、
空しさを感じるのはなぜ？
生活だけでなく、
〝心〞も豊かになりたいから……
すべての苦しみと悲しみに
別れを告げたいから……

だから今日から
〝えんじょい・はぴねす〞

── 主な内容 ──

◇Voice of Buddha
最終解脱者が贈る幸福メッセージ
「光を超えて──えんじょい・はぴねす」
麻原彰晃尊師

◇Special Lecture
精神世界ファン必読の特別講義！
「宗教は一つの道」麻原彰晃尊師

◇JĀTAKA Stories
「仏陀釈迦牟尼からの贈り物
──釈迦牟尼の輪廻転生に見る真実」

◇Healthy Cooking
「健康を食べよう！」

◇あなたもわたしも創造主
飛行船、ロボット、ホバークラフト……、つくる喜びを忘れた我々に科学者気分を味わせてくれる誌上製作コーナー

◇Science and Truth
仏教の真理を科学の視点で斬る！
「真理を科学する」

◇Monthly Highlights
「ズーム・アップ・オウム真理教」

◇One Point Yoga
「ワンポイント・ヨーガ」

「宗教には興味があるけど、
でも信徒になるのはちょっと……」

そんなあなたに贈る最高のプレゼント！

『えんじょい・はぴねす』を定期購読していただきますと、様々な特典が受けられる〝EH会員〟になることができます。EH会員は信徒ではありませんが、自由にオウムのイベントに参加できる権利を持っています。気軽な気持ちでオウムをのぞいてみませんか？

―― 苦悩を超えて ――
えんじょい・はぴねす



EH会員７大特典

1. オウム真理教主催のイベント、説法会等へ自由に参加できます。
2. 国内および海外の本支部道場をいつでも利用できます。
3. 幸福情報を満載したEH会員手帳をもれなくプレゼントいたします。
4. 成就者との対面および電話による 悩み相談が受けられます。
5. 各種イニシエーション を受ける資格が得られます。
6. 聴くだけで心が癒えるアストラル音楽テープなど、オウム真理教の販売物を信徒同様の安価で購入できます
7. 日本シャンバラ化計画基金（永代帰依祈願を除く）への参加資格が与えられます。

〝えんじょい・はぴねすの会〟会員（EH会員）になるには？
※入会金は一切無料。月刊『えんじょい・はぴねす』の定期購読を申し込むと、料金の払い込みが確認された時点でEH会員となります。なお、定期購読の申し込み は6ヵ月単位で郵送料込み6000円です。

※詳しくはお近くのオウム真理教の本・支部道場までお問い合わせください。
（121ページ参照）

麻原彰晃の

聖 者 誕 生

定価700円（本体680円）

1991年12月1日　初版発行

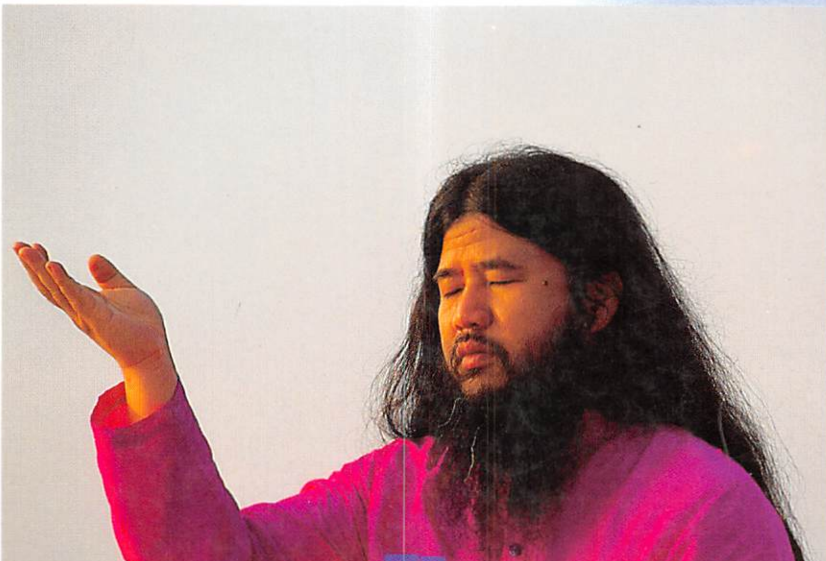
●編　集　　オウム出版広報編集部
●発行人　　松本知子　石井久子
●発行所　　株式会社　オウム
〒154　東京都世田谷区世田谷2－8－17
電話　03（3439）6043
振替　東京2－109325

ISBN4－900497－94－0　C0014　P700E





麻原彰晃の



聖者誕生

ISBN4-900497-94-0　C0014　P700E　定価 700円（本体 680円）